

平安京左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡

— 中京区役行者町における埋蔵文化財発掘調査 —

2019年

合同会社 アルケス

平安京左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡

— 中京区役行者町における埋蔵文化財発掘調査 —

2019年

合同会社アルケス

例 言

1. 本書は京都府京都市中京区室町通姉小路下る役行者町 361 番地他に所在する「平安京左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡」の報告書である。
2. 本調査は、所在地の開発工事計画に伴って行われた試掘調査によって遺構が確認されたため発掘調査が行われた。
3. 本調査は、NTT 都市開発株式会社の委託を受けた合同会社アルケスが実施した。
4. 本調査の発掘期間は平成 30 年 3 月 5 日から平成 30 年 5 月 7 日である。
5. 調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言のもと行った。
6. 本調査の体制は以下のとおりである。

調査主体： 合同会社アルケス

調査員： 持田 透

調査補助員： 加世田 悠仁（国際文化財株式会社）・谷本 和幸
7. 本報告書の執筆は、持田と加世田が分担して行った。4. 遺物（5）金属製品と 5. 科学分析は加世田が執筆し、それ以外を持田が執筆した。編集は持田が行った。
8. 本報告書では以下の地図を調整・編集した。

京都市地形図（1：2500）「三条」京都市都市計画局
9. 本報告書で示す座標・方位は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T. P.）に基づく数値である。
10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
11. 本報告書に掲載した写真は、遺構を持田・加世田、遺物を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。
12. 本調査にあたり、以下の方に助言をいただいた。（敬称略）

藤原 学（一般社団法人益富地学会館）
13. 出土した遺物は、関連する図面、写真とともに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管されている。

凡 例

1. 写真図版の縮尺は任意である。
2. 報告書に掲載した遺物番号は実測図、観察表、写真図版にそれぞれ対応している。
3. 本報告書で使用した土色は、以下を使用した。
『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修
4. 出土した遺物の分類や年代は、以下を参考にした。また遺物の時期表記は小森氏の編年に依拠した。

小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』

奈良時代		平安時代					鎌倉時代		室町時代			安土桃山	江戸時代			明治													
750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740代頃	1820代頃																
京都 I	京都 II	京都 III	京都 IV	京都 V	京都 VI	京都 VII	京都 VIII	京都 IX	京都 X	京都 XI	京都 XII	京都 XIII	京都 XIV																
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

図1 土器編年・年代観

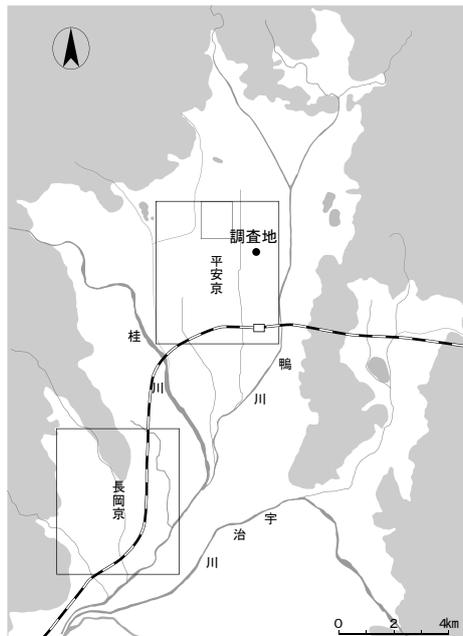


図2 調査地位置図

目 次

1. 調査経過	1
2. 立地と環境	1
3. 遺構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構の概略	5
(3) 遺構	9
(a) 1 a 面 (江戸時代後半)	9
(b) 1 b 面 (江戸時代前半～中頃)	10
(c) 2 a 面の遺構 (室町時代後半～安土桃山時代)	13
(d) 2 b 面の遺構 (室町時代)	16
(e) 3 面の遺構 (平安時代～鎌倉時代・室町時代)	22
4. 遺物	27
(1) 土器	27
(a) 平安時代以前	27
(b) 室町時代	27
(c) 江戸時代	32
(2) 鑄造関連遺物	32
(3) 瓦製品	34
(4) 石製品	36
(5) 金属製品	36
5. 科学分析	40
6. まとめ	42
(1) 遺構の変遷	42
(2) 「金澤犀川宮竹屋亀田伊右衛門」銘の白磁合子について	42

挿 図 目 次

図1	土器編年・年代観	
図2	調査地位置図	
図3	調査区位置図	1
図4	調査区配置図	2
図5	調査前全景（北西から）	2
図6	現地説明会風景（南から）	2
図7	周辺調査位置図	3
図8	調査区東壁断面図	6
図9	1 a 面 平面図	7
図10	1 b 面 平面図	8
図11	室2 実測図	9
図12	池3・室4 実測図	11
図13	室4 実測図	12
図14	2 a 面 平面図	14
図15	建物1、地業26、瓦溝21 実測図	15
図16	2 b 面 平面図	17
図17	井戸68・211 実測図	18
図18	建物2 実測図	19
図19	土坑15・102・120・151・235 実測図	20
図20	土坑207・236、埋甕210・258 実測図	21
図21	3 面 平面図	23
図22	井戸63 実測図	24
図23	土坑256・建物3 実測図	25
図24	井戸275 実測図	26
図25	出土遺物実測図1	28
図26	出土遺物実測図2	29
図27	出土遺物実測図3	31
図28	出土遺物実測図4	32
図29	出土遺物実測図5	33
図30	出土遺物実測図6	34
図31	出土遺物実測図7	34
図32	出土遺物実測図8	35
図33	出土遺物実測図9	36
図34	出土遺物実測図10	37

図35	出土遺物実測図11・拓影図1	38
図36	出土遺物拓影図2	39

表 目 次

表1	周辺主要調査一覧	4
表2	遺構概要	5
表3	遺物概要	27
表4	科学分析結果一覧1	40
表5	科学分析結果一覧2	41
表6	出土遺物観察表	44
表7	出土鑄造関連遺物観察表	49
表8	出土瓦観察表	49
表9	出土石製品観察表	49
表10	出土金属製品観察表	50

図版目次

図版1	1	1面	全景（北から）
	2	室4	（南西から）
図版2	1	室4	三和土製施設（南東から）
	2	室4	三和土製施設（北から）
図版3	1	室2	（南西から）
	2	室2	三和土製施設（南から）
図版4	1	2面	全景（北から）
	2	埋甕28	（西から）
	3	瓦溝21	（東から）
図版5	1	埋甕258	（東から）
	2	埋甕210	（南から）
	3	土坑15	（東から）
図版6	1	3面	全景（北から）
	2	井戸275	（東から）
	3	井戸211	（南西から）
図版7	出土遺物1		
図版8	出土遺物2		
図版9	出土遺物3		

図版 10 出土遺物 4

出土遺物 5

図版 11 出土石製品 1

出土瓦、出土石製品 2

図版 12 出土石製品 3

出土金属製品

1. 調査経過

今回の発掘調査は京都市中京区役行者町の建物建築に伴う土地開発に先立って行われた。文化財保護法第93条に基づく届出を受け、京都市文化財保護課による試掘調査が行われた。試掘調査の結果、対象地約1,000㎡のうち南側に遺跡が遺存することが確認され、224㎡の発掘調査が指導された(図3・4)。なお南東にある既存木造建物は保存されるため調査の対象から除外されている。合同会社アルケスは開発事業者であるNTT都市開発株式会社からの委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査は平成30年3月5日から表土掘削を開始し、3面の調査を行った。同一遺構面で部分的に掘り下げた調査面があり、その場合はa面、b面とし、遺構面ごとに京都市文化財保護課の検査を受け、平成30年5月7日に終了した。なお、平成30年4月21日に調査の成果を近隣住民向けに説明会を行い、約60名の参加者があった(図6)。

2. 立地と環境

調査地は、室町通りの西沿いで姉小路通りと三条通りの間で北側に接する立地である。平安京の条坊では左京三条三坊五町跡にあたり、平安時代中期には少納言源実明の母の屋敷があったが元永元(1118)年に焼失したといふ(『中右記』)、鎌倉時代の記録によると庶民宅となっていたようである(『平安京提要』)。また当地は藤原道長の政敵、藤原伊周邸とも推定されている(『京都市史



図3 調査区位置図(1:1,250)

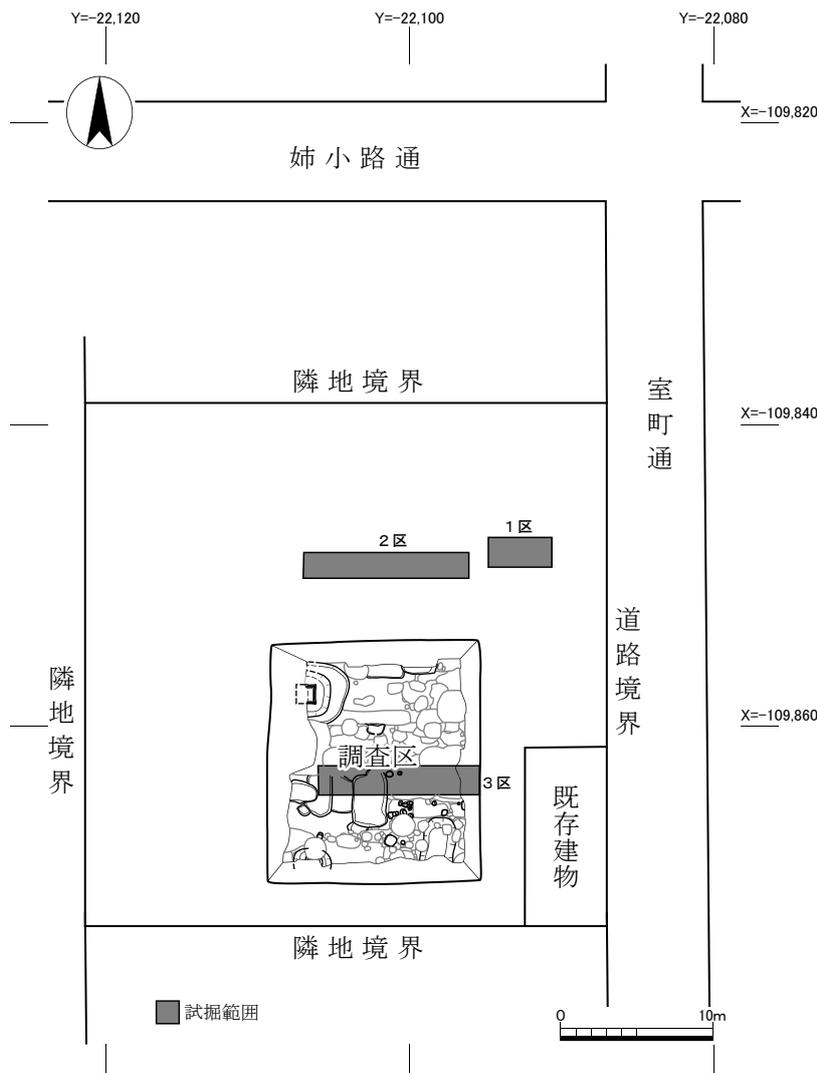


図4 調査区配置図 (1 : 500)

の研究』)。なお、東接する左京三条三坊十二町は平安時代後期に白河天皇や鳥羽天皇の御所としても利用された三条西殿である。

14世紀代(中世)では、当地付近に風呂があった記述(『師守記』)や、15世紀後半の応仁の乱以前の祇園会の記録にはすでに「ゑんの行者山」の記録がみられることから、当地が三条大路に接しておりにぎわいをみせていたと考えられる。江戸時代では大名の呉服所が営まれたとされている(『京都市の地名』)。

また当地は、京都盆地を南流する鴨川と紙屋川の扇状地で奈良時代以前は微高地の地形となっており、縄文時代から古墳時代にかけての集落跡の存在が想定される(烏丸御



図5 調査前全景(北西から)



図6 現地説明会風景(南から)

池遺跡)。

三条三坊五町跡の既往調査をみると、調査10では、平安時代前期の掘立柱建物や溝、平安時代後期は土坑を確認している。また平安時代後期から鎌倉時代にかけての土坑などからはガラスや石製品が出土している。江戸時代では井戸、土坑に加え、鑄造関連遺物も確認されている。調査11では室町小路の西側側溝を検出している。また平安時代後期の柱穴、鎌倉時代から室町時代にかけての土坑や溝、江戸時代の井戸や暗渠を確認している。調査12では縄文時代の土坑や溝を確認している。平安時代中期の土坑や溝、平安時代後期の井戸や土坑、柱穴が確認されている。鎌倉時代では井戸や土坑、柱穴、室町時代では土坑、江戸時代では井戸や土取り穴が確認されている。

調査地周辺は平安時代以前から江戸時代にかけての

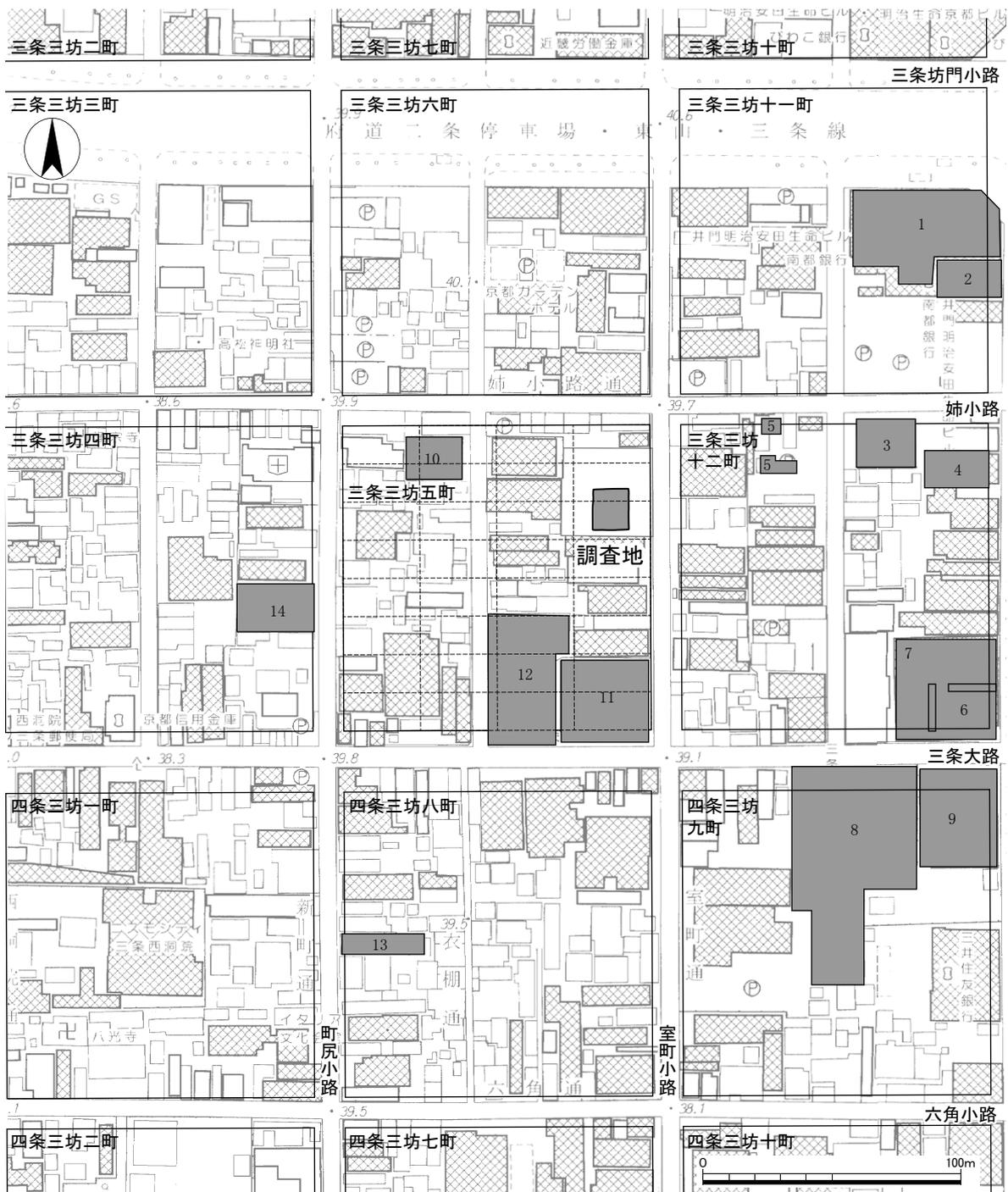


図7 周辺調査位置図 (1 : 2,500)

遺構・遺物が確認できる。当地は下京街区の北端に位置し、平安時代よりのちは商業の中心地として活発に土地利用されていることが伺える。

表1 周辺主要調査一覧

No.	文献	概要					
		奈良以前	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代	条坊関係
1	『平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告 第14輯 財団法人古代学協会 1984年		門		集石墓・土坑墓		烏丸小路西溝
2	『平安京左京三条三坊』『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年		井戸	溝	井戸		烏丸小路西溝
3	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告 第7輯 財団法人古代学協会 1983年			井戸・土坑	井戸・土坑・柱穴		
4	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告 第7輯 財団法人古代学協会 1983年		平安時代末から鎌倉時代の井戸・土坑		井戸・土坑・柱穴		
5	『平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡』株式会社イビソク 2018年		後期の土坑・溝	柱穴・土坑・溝・井戸			姉小路南溝
6	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告 第3輯 平安文化の研究2 財団法人古代学協会 1971年		後期の井戸・土坑	井戸・溝・土坑			烏丸小路西溝・三条大路北溝
7	『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告 第7輯 財団法人古代学協会 1983年		後期の井戸・土坑	鎌倉～安土桃山の井戸・柱穴・建物・石組遺構			烏丸小路西溝・三条大路北溝
8	『平安京左京四条三坊』『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年		中期から後期の建物・池				
9	『平安京左京四条三坊九町一第一勸業銀行京都支店改築に伴う調査一』古代文化調査会 1997年		後期の遺水・建物・井戸・土坑	池・溝・石敷遺構・井戸・柱穴			
10	『平安京左京三条三坊五町』『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1980年		前期の掘立柱建物・溝、後期の土坑・ガラス・石製品出土	土坑	井戸・土坑・集石遺構	井戸・土坑・鑄造遺構	
11	『平安京左京三条三坊五町』『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1979年		後期の柱穴	土坑・溝		井戸・暗渠	室町小路西溝
12	『平安京左京三条三坊五町・烏丸御池遺跡』古代文化調査会 2011年	縄文時代の土坑・溝	中期の土坑・溝、後期の井戸・土坑・柱穴	井戸・土坑・柱穴	土坑	井戸・土取穴	
13	『平安京左京四条三坊八町・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年	弥生時代の土坑・溝	前期の土坑、後期の土坑・溝	鎌倉時代後期から室町時代前期の土坑・地下室・溝・井戸		土坑	
14	『平安京左京三条三坊四町跡』古代文化調査会 2018年		土坑	磚敷き室		石敷遺構・井戸	

3. 遺構

(1) 基本層序 (図8)

現地表面から約2.2 mまで掘り下げて調査を行った。地表面より0.4 m下では黒褐色泥砂(5層、20層)を基調とした整地土を確認した。この整地土上で三和土製の東西溝と焼瓦や焼土を多量に含んだ埋土の遺構(室)などを検出した。上記の整地土を除去し、さらに0.5 m下で暗褐色泥砂(35層)などの整地土を確認した。さらにこの整地土の下で、灰黄褐色泥砂(44層)を基調とした整地土を確認した。この整地土上では、黄褐色土と黒褐色土などを互層に突き固めた三和土(48層)や黄橙色シルトの地業(47層)などの遺構を確認した。さらにこの整地土を除去すると灰色泥砂層を基調とした整地土を部分的に検出した。この整地土上で黄褐色シルトと緑灰色シルト埋土の遺構を検出した。この整地土は層厚0.05 m程度と薄く、この整地土の下で浅黄橙色シルト(62層)を基調とした地山面を確認した。調査区北側では灰色シルト(63層)を基調とした粘性の強い地山面であった。これらのシルト・粘土層の下では灰白色砂礫層(64層)が厚く堆積していた。またシルト層(62層)は調査区南側が厚く堆積しており、層厚は0.90 mに達する部分も確認できた。

5層上面を1 a面、35層上面を1 b面、44・48層上面を2 a面、地業(47層)を除去して検出した遺構群を2 b面、灰色泥砂層上面を3面として調査した。1 a面では江戸時代後半、1 b面は江戸時代前半から中頃、2 a面は室町時代後半から安土桃山時代、2 b面は室町時代中頃から後半、3面では平安時代中期から鎌倉時代の遺構を検出した。1 a面では炭を多く含む黒褐色泥砂を確認しており、火災処理層と考えられる。

(2) 遺構の概略

今回の調査では平安時代から江戸時代までの遺構を検出した(表2)。平安時代から鎌倉時代にかけての遺構は、縦板組横棧留方形井戸1基の他、素掘井戸などを検出した。室町時代の遺構は、礎石建物や石組井戸を検出した。また調査区全域にわたって粘土採掘土坑と考えられる多様な形状の土坑を多数検出した。安土桃山時代では、地業によって整地された建物や三和土、またそれらに付属すると考えられる施設を検出した。江戸時代では、井戸や土坑、室などを検出した。石組壁の室は巨大な切り石を使用しているだけでなく、室内に三和土製の付属施設を伴ったものであった。

以下、調査した遺構面順に特筆すべき遺構を詳述する。

表2 遺構概要

遺構面	遺 構	時 代
1 a 面	溝1、室2、室4、池3、井戸8、土坑6	江戸時代
1 b 面	室53、井戸32、土坑12	江戸時代
2 a 面	建物1、礎石46、三和土、瓦溝21、埋甕28、地業26・47、土坑71・81・165	室町時代
2 b 面	建物2、井戸68・211、土坑15・83・94・102・120・133・151・253、埋甕210・258	室町時代
3 面	建物3、井戸63・275、土坑207・248・250・256	平安時代～ 鎌倉時代・室町時代

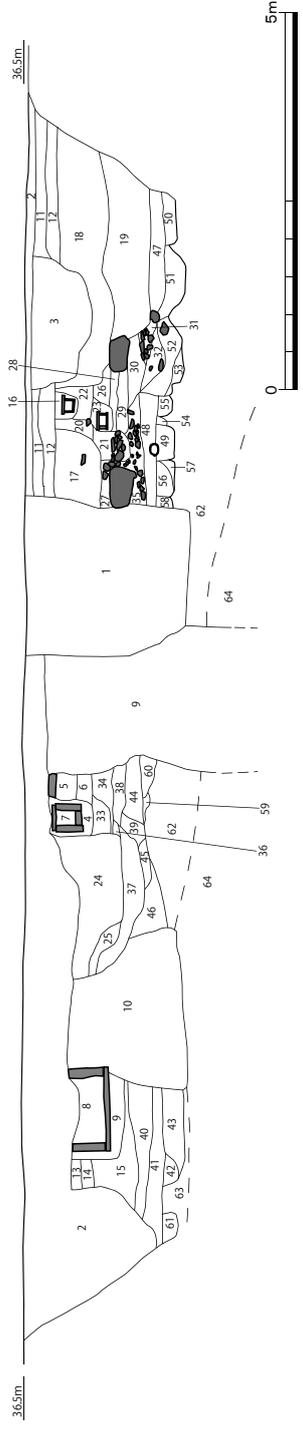


図 8 遺跡区沖壁断面図 (1 : 100)

- | | | | | | | | | | | | |
|----|----------|--------------------------|----|---------|--------------------|----|---------|----------------------------------|----|----------|----------------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (試掘トレンチ埋土) | 20 | 10YR3/2 | 黒褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 40 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (桃山時代遺構) | 60 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) |
| 2 | 10YR3/1 | 黒褐色泥砂 (表土) | 21 | 10YR3/1 | 黒褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 41 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (桃山時代遺構) | 61 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) |
| 3 | 2.5YR4/6 | 赤褐色泥砂 灰色中砂と互層堆積 (江戸時代遺構) | 22 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (江戸時代整地層) | 42 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (桃山時代遺構) | 62 | 7.5YR8/4 | 浅黄褐色シルト (地山) |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色泥砂 (三和土溝 1) | 23 | 10YR4/2 | 灰黄褐色泥砂 (江戸時代瓦暗渠) | 43 | 10YR3/2 | 黒褐色泥砂 (桃山時代遺構) | 63 | N6/ | 灰色シルト (地山) |
| 5 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 24 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 44 | 10YR4/2 | 灰黄褐色泥砂 (地業 47) | 64 | 5YR8/1 | 灰白色砂礫 (地山) |
| 6 | 10YR4/4 | 褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 25 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 45 | 10YR5/6 | 黄褐色泥砂 (地業 47) | | | |
| 7 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (江戸時代三和土遺構) | 26 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 46 | 10YR4/2 | 灰黄褐色泥砂 (地業 47) | | | |
| 8 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (江戸時代遺構) | 27 | 10YR5/2 | 灰黄褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 47 | 10YR8/6 | 黄褐色シルト (地業 26) | | | |
| 9 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (江戸時代井戸) | 28 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 48 | 10YR5/6 | 黄褐色土と 10YR3/2 黒褐色土の互層非常に固い (三和土) | | | |
| 10 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (土坑 12) | 29 | 10YR4/4 | 褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 49 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色シルト 固い (土坑 165) | | | |
| 11 | 7.5YR4/2 | 灰黄褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 30 | 10YR3/1 | 黒褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 50 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| 12 | 10YR6/2 | 灰黄褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 31 | 10YR3/1 | 黒褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 51 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| 13 | 10YR3/1 | 黒褐色泥砂 (江戸時代整地) | 32 | 10YR3/1 | 黒褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 52 | 10YR3/2 | 黒褐色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| 14 | 10YR3/1 | 黒褐色泥砂 (江戸時代整地) | 33 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 53 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| 15 | 10YR7/1 | 灰白色中砂 しまりなし (池 3) | 34 | 10YR5/6 | 黄褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 54 | 10YR3/4 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| 16 | 10YR3/1 | 黒褐色泥砂 (江戸時代瓦暗渠) | 35 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 55 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| 17 | 10YR2/1 | 黒色泥砂 (江戸時代遺構) | 36 | 10YR4/2 | 灰黄褐色泥砂 (江戸時代遺構) | 56 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| 18 | 10YR7/1 | 灰白色中砂 しまりなし (江戸時代遺構) | 37 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色シルト (江戸時代遺構) | 57 | 10YR3/4 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| 19 | 10YR7/1 | 灰白色細砂 (江戸時代遺構) | 38 | 10YR4/4 | 褐色泥砂 (江戸時代整地層) | 58 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) | | | |
| | | | 39 | 10YR4/2 | 灰黄褐色泥砂 (安土桃山時代遺構) | 59 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 (室町時代遺構) | | | |

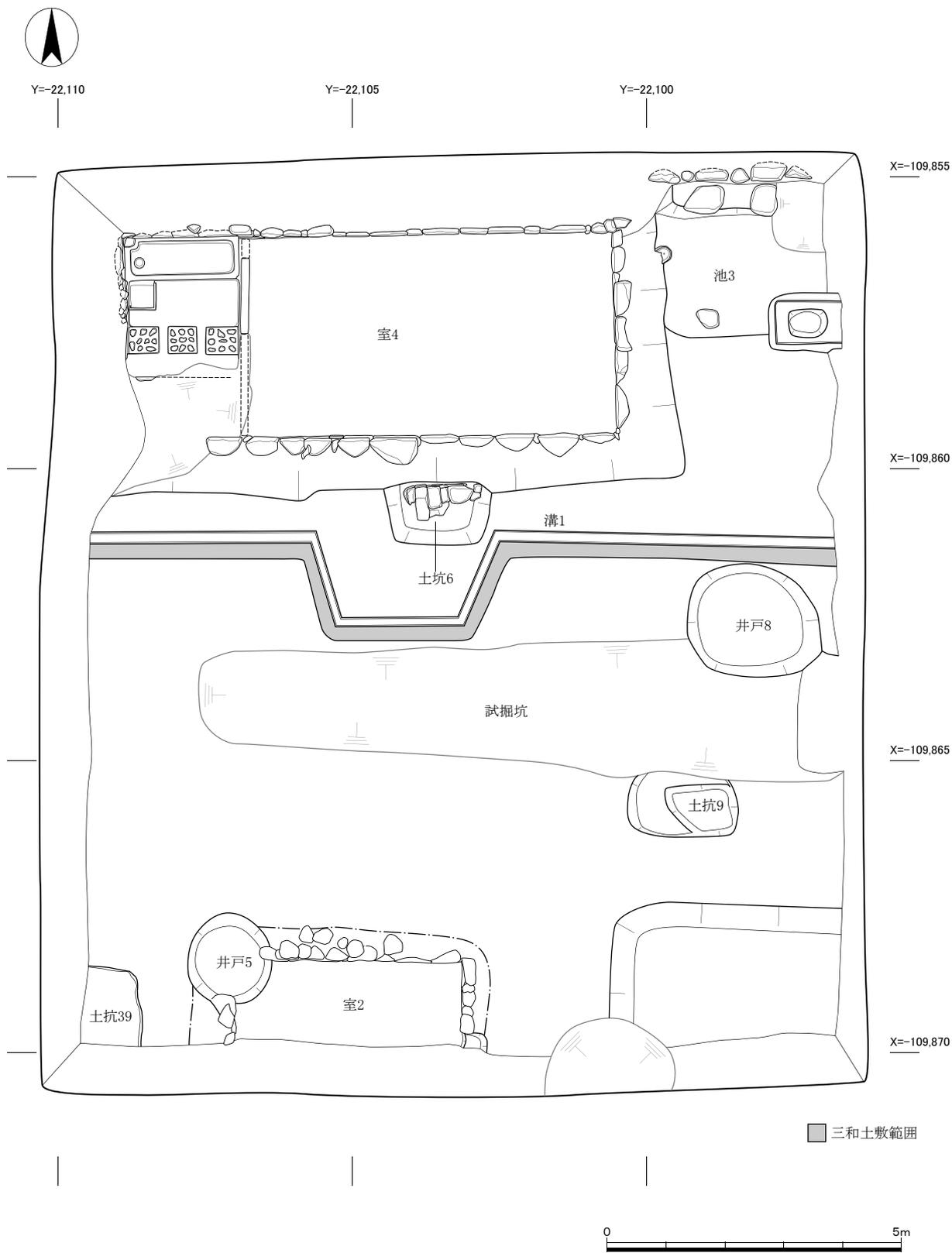


図9 1 a 面 平面図 (1 : 100)

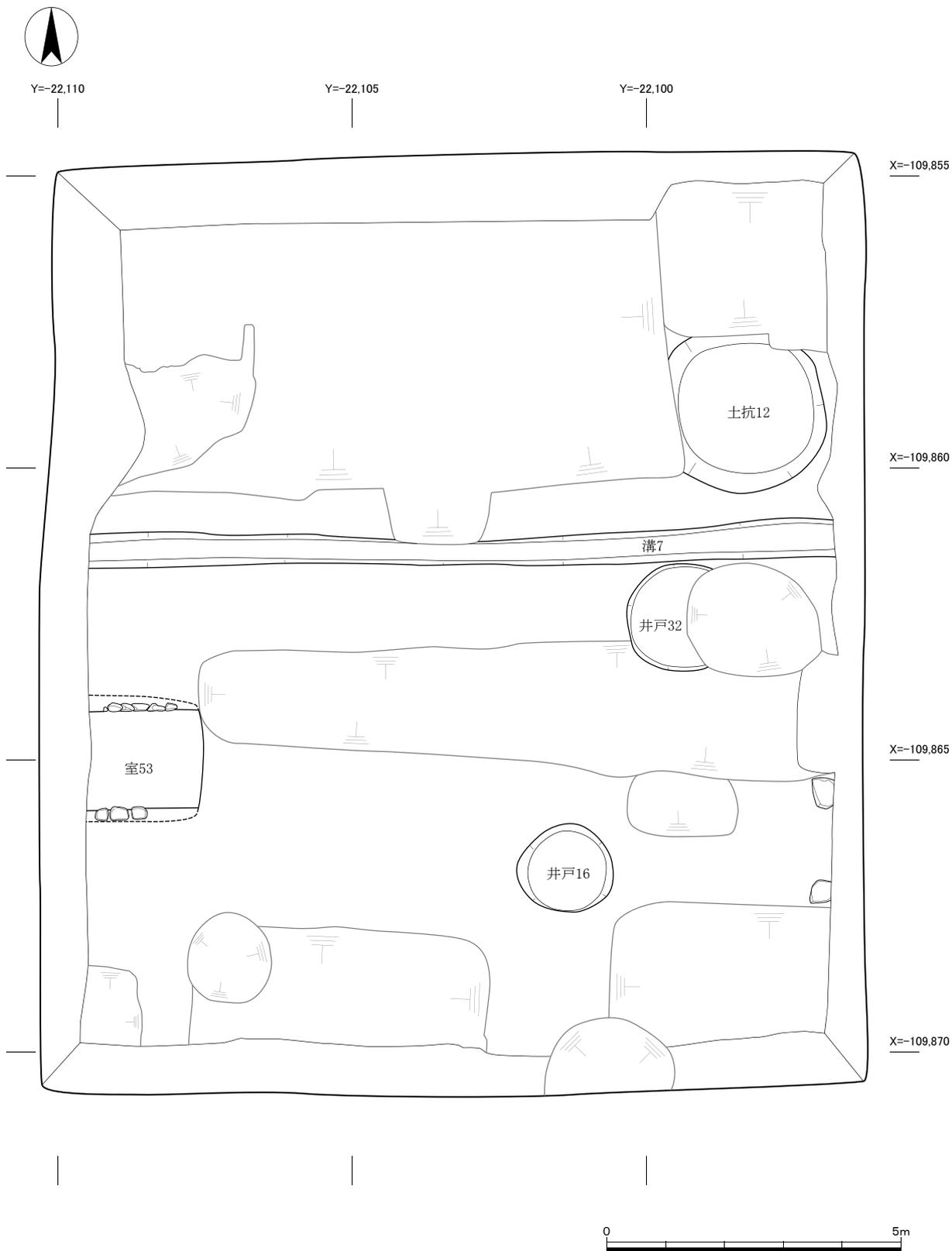


图10 1 b 面 平面图 (1 : 100)

(3) 遺構

1 面の遺構

江戸時代を中心とする遺構面である。江戸時代前期から中期の遺構面で遺構検出したが、埋土の状況などから江戸時代後期以降の遺構群を1 a 面、江戸時代中期の遺構を1 b 面とした。井戸や室、土坑などを検出した(図9・10)。

(a) 1 a 面(江戸時代後半)

溝1(図9) 調査区中央やや北で検出した三和土製の東西溝で、調査区中央で台形に曲がる。溝の幅は0.20 mで深さは0.15 mを測る。調査区東壁沿いでは溝の上に三和土製の蓋が確認できた。蓋が全体を覆っていたかどうかは不明である。また溝の南側0.24 mには三和土片が溝の形状に沿って薄く広がっており、三和土によって土間状にしていた可能性がある。

埋土からは土師器片と泥めんこが出土した。

室2(図11) 調査区南で検出し、調査区南壁以南へと続く。北西隅は井戸に壊されている。壁面は切石を積み上げており、内寸は東西長3.82 m、南北検出長1.42 mを測る。切り石は花崗岩製で

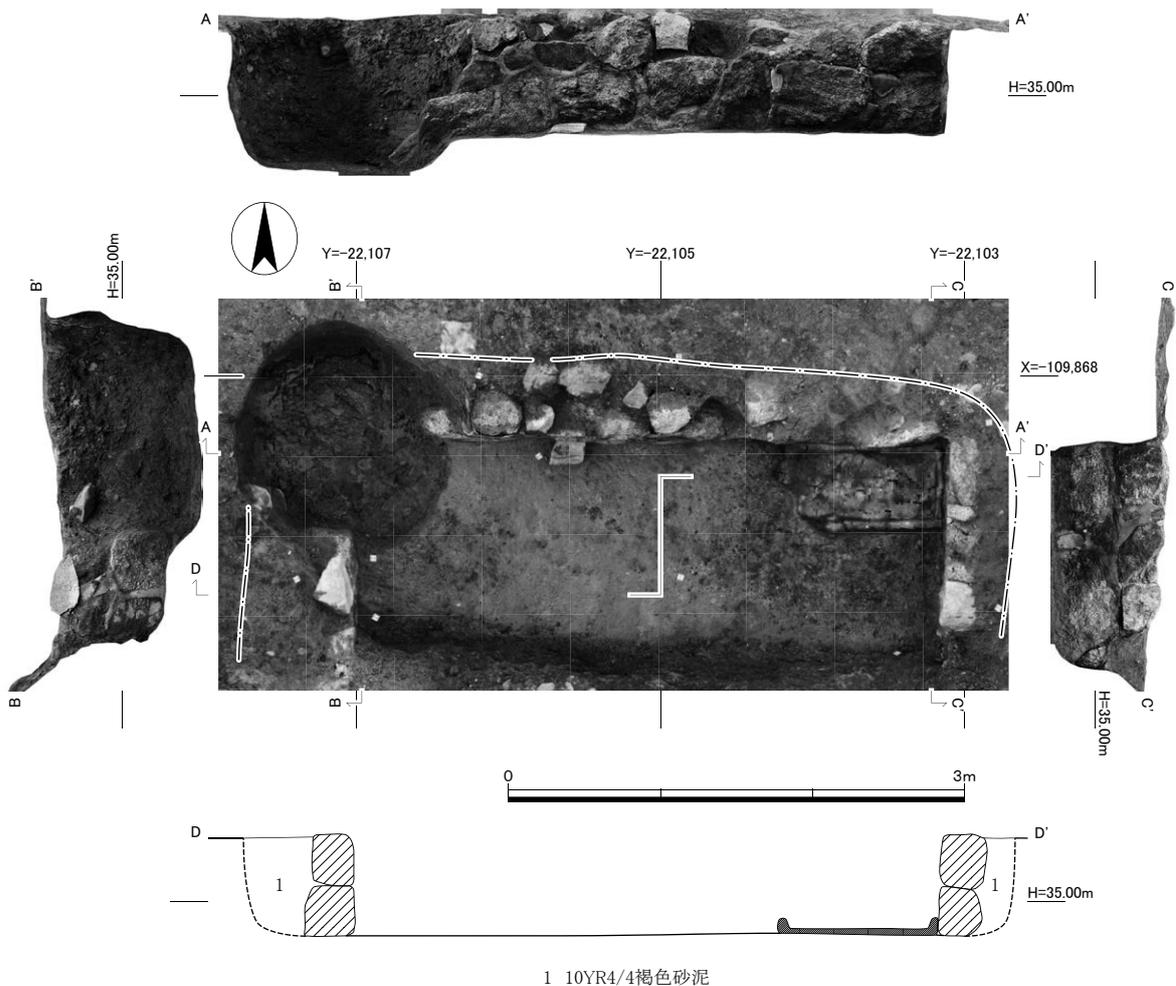


図11 室2 実測図(1:50)

一辺 0.30 m から 0.55 m で、石材の奥行は 0.25 m から 0.30 m を測る。検出面から床面までの深さは 0.66 m で、粘土を叩きしめて平坦な床面を形成していた。また室内北東隅の床面には長さ 1.00 m、幅 0.50 m、深さ 0.10 m を測り、縁が盛り上がった水受け状の三和土製品が置かれていた。埋土は焼土や多量の炭が堆積しており、火災に伴う瓦礫で埋没したと考えられる。

埋土からは土師器、陶磁器、金属製品が出土した。

室 4 (図 12・13) 調査区北で検出した。南西隅は攪乱坑に壊されている。壁面は切石を積み上げており、内寸は東西長 8.20 m、南北長 3.45 m を測る。切り石は花崗岩製で一辺 0.40 m から 0.70 m で、石材の奥行は 0.30 m から 0.50 m を測る。南側の石列に限っては溝が掘りこまれ人頭大の割石を並べて高さを整え、その上に石積み積み上げている。検出面から床面までの深さは 0.50 m で、粘土を叩きしめて平坦な床面を形成していた。また室内北西隅の床面には東西 1.85 m、南北 2.40 m の範囲を三和土で床面を形成し、南側は縁をわずかに盛り上げており南側に延長していない。東側は幅 0.16 m の細長い延べ石を南北に並べて三和土で固めており、石室南辺まで延長した箇所をみると三和土の痕跡が残っていた。攪乱によって壊されているが、この位置で室内を仕切っていた可能性がある。また三和土の北端に長さ 1.94 m、幅 0.72 m、深さ 0.35 m の水槽状の遺構を配し、西端に直径 0.15 m の穴をあけて壺を埋めている。水槽の床面はゆるやかに穴にむかって傾斜しており、埋めた甕に溜まるように仕上げている。水槽状遺構の南側に接して一辺 0.46 m の方形の穴があり、深さ 0.40 m まで側面を三和土で固め、底面も三和土で形成していた。穴には蓋ができるように段が設けられている。穴の南側には一辺 0.50 m を測る正方形の台座状の遺構があり、それぞれ 0.14 m の間隔を開けて設置されている。台座状遺構はこぶし大の川原石を表面に露出させるように三和土で形成していた。埋土は焼土や多量の炭が堆積しており、火災に伴う瓦礫で埋没したと考えられる。

埋土からは土師器、陶磁器、金属製品が出土した。

井戸 8 (図 9) 調査区中央東で検出した井戸である。井戸 32 を壊しており、井戸 32 に面していたところにブロック状の三和土を積み上げて崩落を防いでいた。井戸枠は確認できなかった。

土坑 6 (図 12) 室 4 に南接して検出した土坑である。土坑内部にブロック状の三和土片が中央に重なっていた。室 4 に関係する遺構と考えられる。

埋土からの遺物の出土はない。

池 3 (図 12) 室 4 の北東で検出した池と考えられる遺構である。調査区北壁で検出した人頭大の割石や川原石を幅 2.2 m 以上に渡って 2 段の階段状に配置しており、下段の石の面に合わせて黄褐色シルトを約 0.20 m 貼っていた。室 4 と接する位置で正位に埋設された瓦質の鉢を半分検出した。また黄褐色シルトの範囲の南東部で三和土製の方形枳を検出し、底面が意図的に穿たれていた。これらを一連の遺構としてとらえられると考え、池とした。埋設した鉢や三和土枳は魚溜としてとらえた。

覆土や黄褐色シルト埋土から遺物が出土したが細片で詳細不明である。

(b) 1 b 面 (江戸時代前半～中頃)

室 53 (図 10) 調査区西で検出し、調査区西壁以西へと続く。壁面はこぶし大の川原石を底奥行

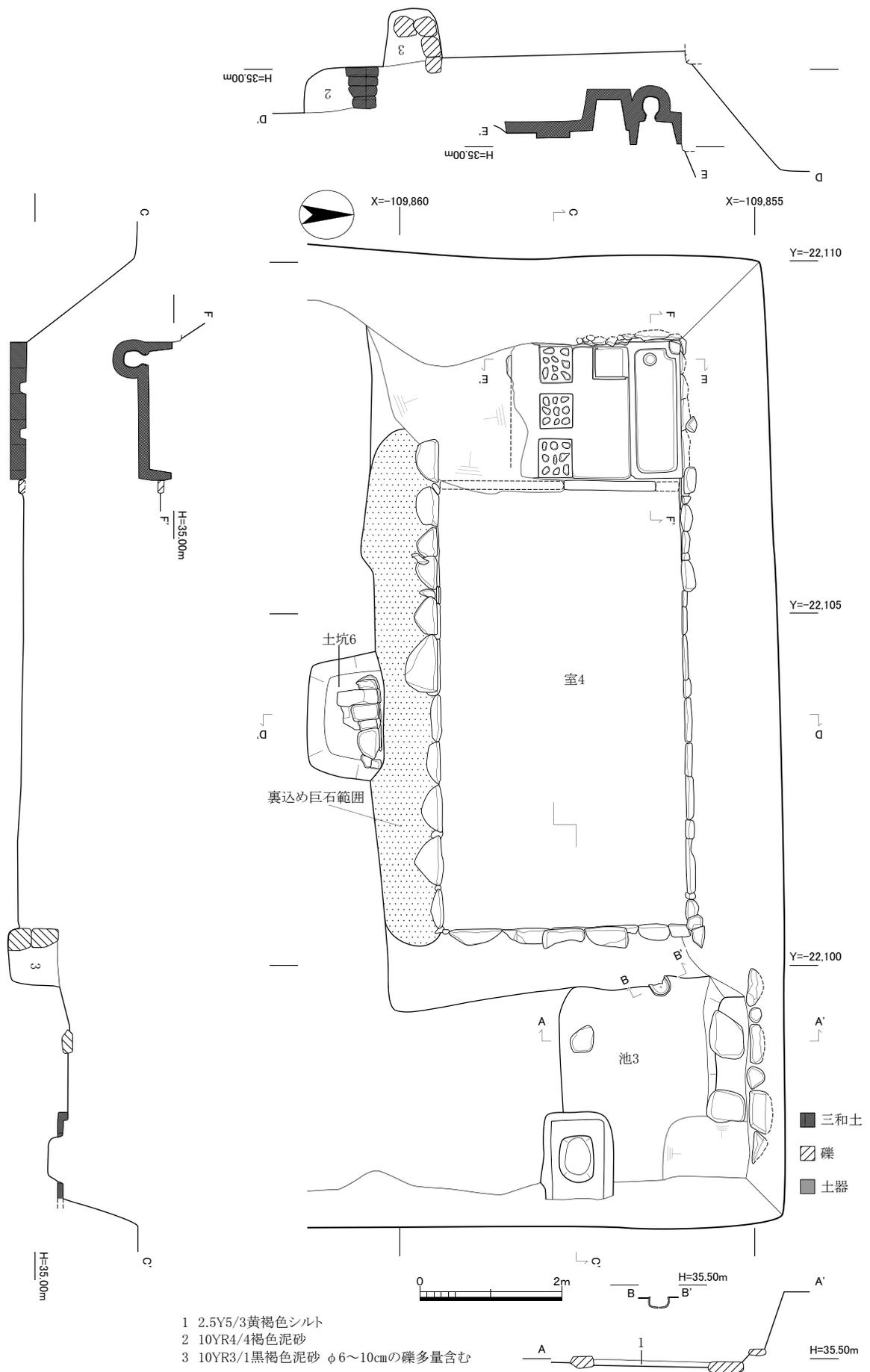


図12 池3・室4 実測図 (1:80)

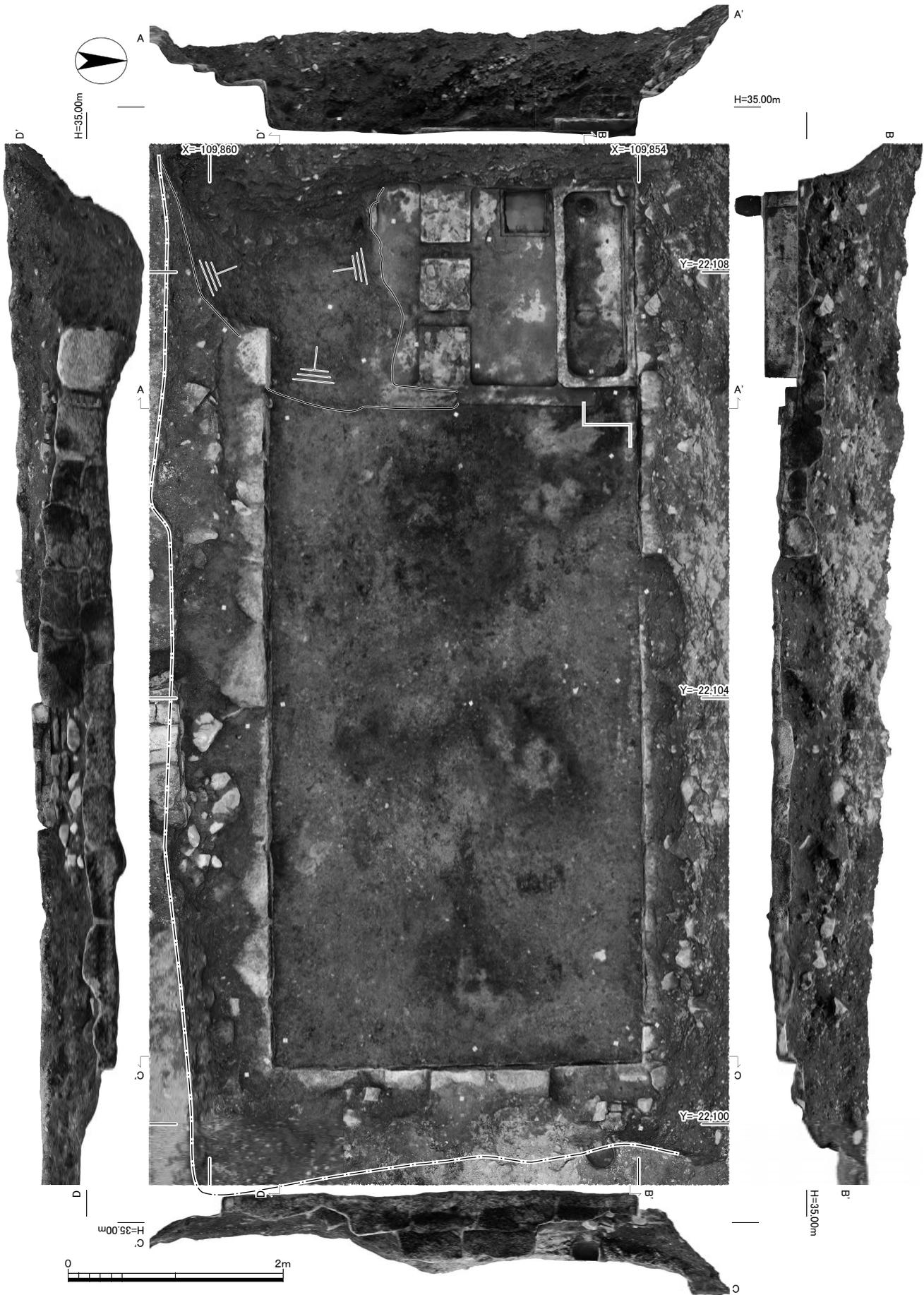


图13 室4 实测图 (1 : 50)

0.20 mの間に並べて壁面を粘土で積み上げている。室内長は南北1.65 m、東西検出長1.90 mを測る。検出面からの深さは0.80 mである。埋土からは土師器、陶磁器が出土した。遺物の時期は京都XIII期である。

井戸32(図10) 調査区中央東で検出した井戸である。検出面から1.00 mの深さで三和土製の井戸枠を検出した。井戸8によって壊されている。井戸底は確認していない。

土坑12(図10) 調査区北東で検出した直径3.00 m、深さ1.20 mを測る円形土坑である。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたことから粘土探掘土坑と考えられる。埋土から土師器、陶磁器が出土した。遺物の時期は京都XIII期である。

2面の遺構

室町時代から安土桃山時代までの遺構面である。部分的な地業によって形成された遺構群と地業埋土底で検出した遺構群を同一面で検出したため、地業上面で検出した遺構群を2 a面、地業以外で検出した遺構群や地業下で検出した遺構群を2 b面とした。2 a面は室町時代後半から安土桃山時代と考えられる。2 b面は室町時代である(図14・16)。

(c) 2 a面の遺構(室町時代後半～安土桃山時代)

地業26(図15) 調査区南で検出した黄色粘質土を主とした土で地面を改良した痕跡である。検出長は東西で10.80 m、南北で3.30 mである。地業の深さは0.20 mを測る。粘質土上面で礎石群を、地業の端に沿って二枚合せにした丸瓦を連結した水路状の遺構を、さらに丸瓦水路状遺構を覆う三和土を検出した。

埋土からは土師器、陶磁器が出土した。

建物1(図15) 調査区南東隅で、地業26上面で検出した礎石建物である。礎石は一辺が0.25～0.33 mの扁平な川原石で、東西に3間以上、南北に2間以上と考えられる。柱間は東西方向で西から1.88 m、1.25 mを測り、南北方向で1.01 mを測る。

瓦溝21(図15) 地業26北端で検出した、丸瓦を使用した水路状遺構である。検出長は東西に3.43 mを測り、東側では二枚重ねの状態では三和土に覆われていた。丸瓦は幅0.15 m、長さ0.27～0.33 mのものが使用され、玉縁を東側にそろえ、凹面同士を二枚重ねて円形の空間を設けていたと考えられる。三和土よりも西側で凹面を上に向けて据えてあった瓦は本来上部に丸瓦が重なっていたと考えられる。瓦溝は西側に傾斜しており、後世の井戸遺構に壊された部分より西側では痕跡を確認できなかった。

三和土(図15) 調査区南東で地業26を覆うように検出した地面を改良した痕跡である。0.01～0.03 mの層厚で黄褐色泥砂やシルト、砂を互層に叩きしめて固めており、三和土全体の厚さは0.22 mを測る。また瓦溝21が三和土中に入り込んでおり、瓦溝21が暗渠となっていた。瓦溝21を構成する瓦を除去したのちにも三和土と同質の埋土が土坑165で確認できた。

三和土からは土師器、陶磁器の細片が出土した。

埋甕28(図15) 調査区南東部、三和土の西隣で検出した埋甕遺構である。掘方は直径0.22 mを測り、高さ0.19 mの瓦質の壺を正位に据えていた。壺の中からは細かく砕いた炭が大量に出土した。



Y=-22,110

Y=-22,105

Y=-22,100

X=-109,855

左京三条三坊五町
西四行 北二門
西四行 北三門

X=-109,860

X=-109,865

X=-109,870

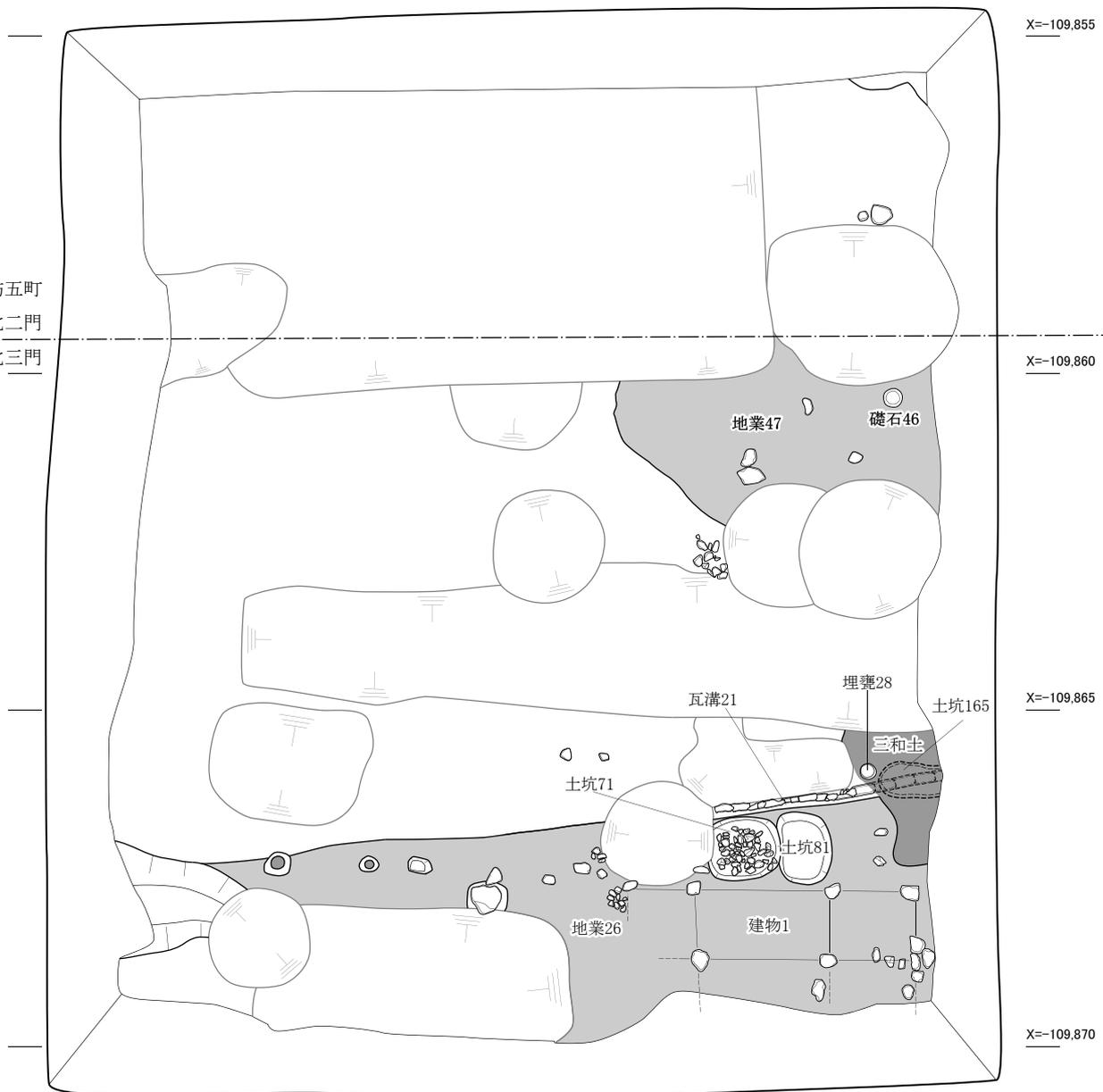


图14 2 a 面 平面图 (1 : 100)

人為的に投入されたものと考えられるため、火消し壺と考えられる。

地業 47 (図 14) 調査区中央東で検出した黄褐色泥砂を主とした土で地面を改良した痕跡である。検出長は東西で 4.70 m、南北で 2.90 m である。地業の深さは調査区東壁付近で 0.25 m を測り、西から東へかけて緩く傾斜する。埋土からは土師器、陶磁器が出土した。

土坑 71 (図 15) 調査区南で地業 26 に付属する土坑である。長軸長 1.09 m、短軸長 0.98 m、深さ 0.55 m を測る楕円形土坑である。埋土には拳大の礫を非常に多く含んでいる。建物 1 との位置関係が重複しないことから浸透桝のような排水施設と考えられる。東側に隣接する土坑 81 も同様の施設かもしれない。埋土からは土師器や陶器が出土した。

土坑 165 (図 15) 調査区南で地業 26 に付属する三和土を除去した後に検出した。長軸長 0.92 m 以上、短軸長 0.51 m、深さ 0.43 m を測る楕円形土坑である。埋土は土坑の上部を覆っていた三和土と似た色調としまりて、三和土とさらに瓦溝 21 と一連の下部構造と判断した。埋土からは下面に対応する室町時代の土師器が出土したが、遺構の成立は上面とした。

礎石 46 (図 14) 調査区中央東で検出した礎石である。ほぼ完存していた石臼を地面に埋め込んで据え付けている。ただし対応する礎石、柱穴を確認できなかったため建物の復元はできなかった。

(d) 2 b 面の遺構 (室町時代)

建物 2 (図 18) 調査区南で、地業 26 除去後に検出した礎石建物である。礎石は一辺が 0.19 ~ 0.30 m の扁平な川原石で、柱穴が掘りこまれている。東西に 8 間以上、南北に 1 間以上と考えられる。柱間は東西方向で 0.91 ~ 1.25 m を測り、南北方向で 1.48 ~ 1.88 m を測る。調査区南端で検出した集石遺構 (集石 64 など) は礎石の根固めで主舎の礎石と考えられる。

井戸 211 (図 17) 調査区中央で検出した石組井戸である。掘方は長軸長 1.76 m、短軸長 1.62 m の楕円形で、検出面から深さ 1.40 m までは井戸枠の石組は残存していなかった。こぶし大の川原石を直径 0.82 m の円形になるように積んでおり、石組は深さ 0.60 m を測る。石組の下で高さ 0.25 m、幅 0.70 m、厚さ 0.02 m の板を四方に立てていた。底は地山の砂礫が露出していた。

埋土からは土師器、陶磁器が出土した。

井戸 68 (図 17) 調査区北で検出した円形石組井戸である。掘方は直径 1.89 m を測り、調査区北側に延長する。検出面から深さ 0.33 m までは井戸枠の石組は残存していなかった。こぶし大の川原石を直径 1.20 m の円形になるように積んでおり、石組は深さ 1.00 m 以上を測る。

埋土からは土師器、陶磁器が出土した。

埋甕 210 (図 20) 調査区南東で検出した埋甕遺構である。掘方は長軸長 0.87 m、短軸長 0.78 m、深さ 0.60 m を測り、掘方をやや埋め戻して、焼締陶器の甕が正位に置かれていた。

埋土からは少量の土師器と陶器片が出土した。

埋甕 258 (図 20) 調査区中央やや南で検出した埋甕遺構である。掘方は長軸長 0.95 m、短軸長 0.87 m、深さ 0.61 m を測り、掘方にほぼ収まるように焼締陶器の甕が正位に置かれていた。東側半分は存在せず、埋土にも復元できるほどの破片が含まれていなかったため、抜き取られたと考えられる。

埋土からは少量の土師器と陶器片が出土した。

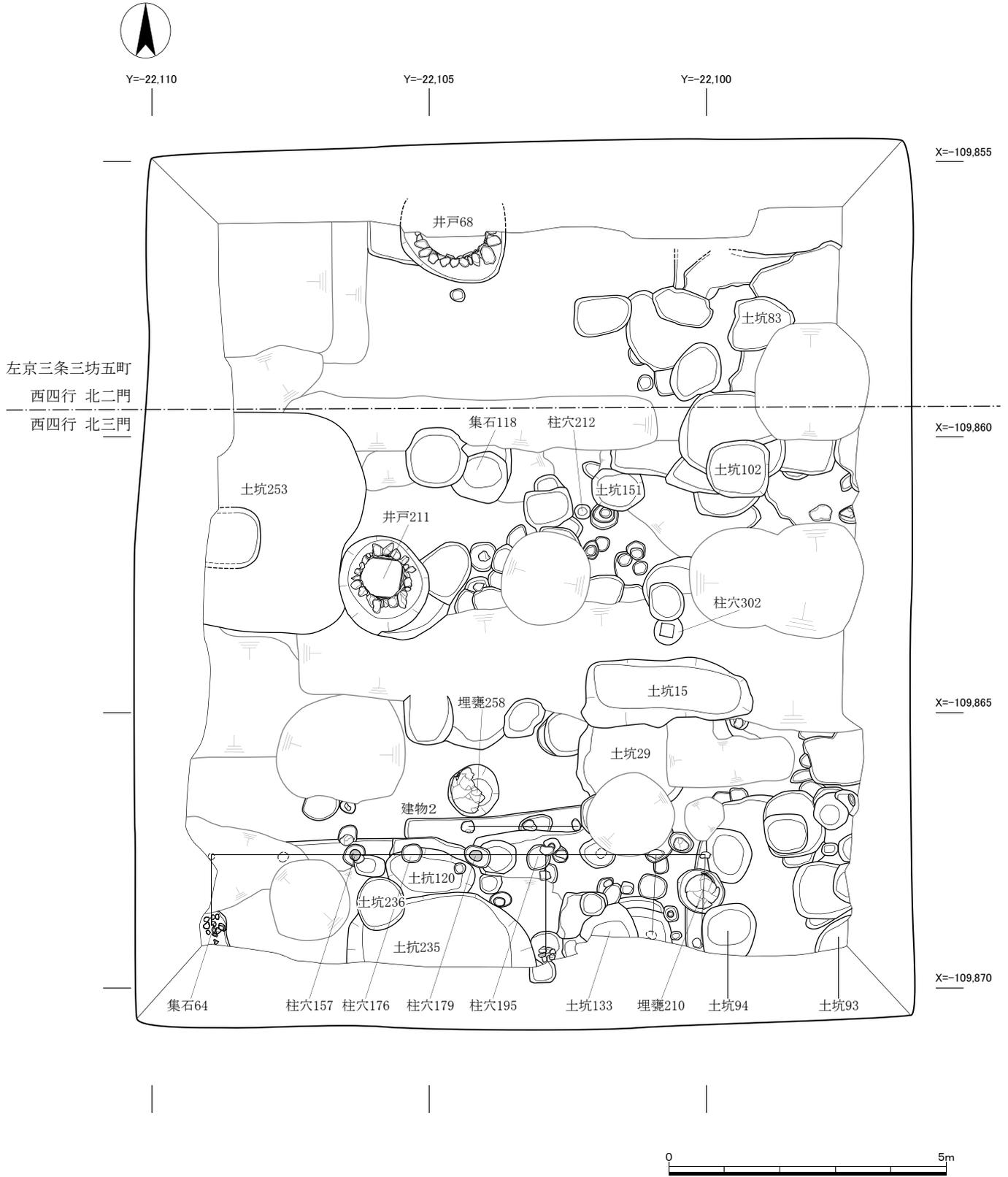


图16 2 b面 平面图 (1 : 100)

土坑 15 (図 19) 調査区中央東、試掘トレンチ床面で検出した長辺 3.04 m、短辺 1.20 m、深さ 1.05 mを測る長方形土坑である。土坑の壁面が強く被熱して赤色化して変色していた。埋土も焼土を多量に含んだ泥砂であった。

埋土から土師器、陶磁器、金属器、石製品が出土した。

土坑 29 (図 16) 調査区南東で検出した直径 2.05 m、深さ 0.33 mを測る円形土坑である。床面が土坑の中心に向かって挿鉢状に傾斜する。

埋土から土師器、陶磁器が出土した。

土坑 83 (図 16) 調査区北で検出した。長軸長 1.25 m、短軸長 0.93 m、深さ 0.44 mを測る楕円形土坑である。埋土には拳大の礫を多く含んでいた。埋土からは土師器や陶磁器が出土した。

土坑 94 (図 16) 調査区南東で検出した直径 0.97 m、深さ 1.20 mを測る円形土坑である。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたことから粘土採掘土坑と考えられる。

埋土から土師器、陶磁器が出土した。

土坑 102 (図 19) 調査区北東で検出した一辺 1.02 m、深さ 0.60 mを測る方形土坑である。地山の砂礫層が露出する位置で床として

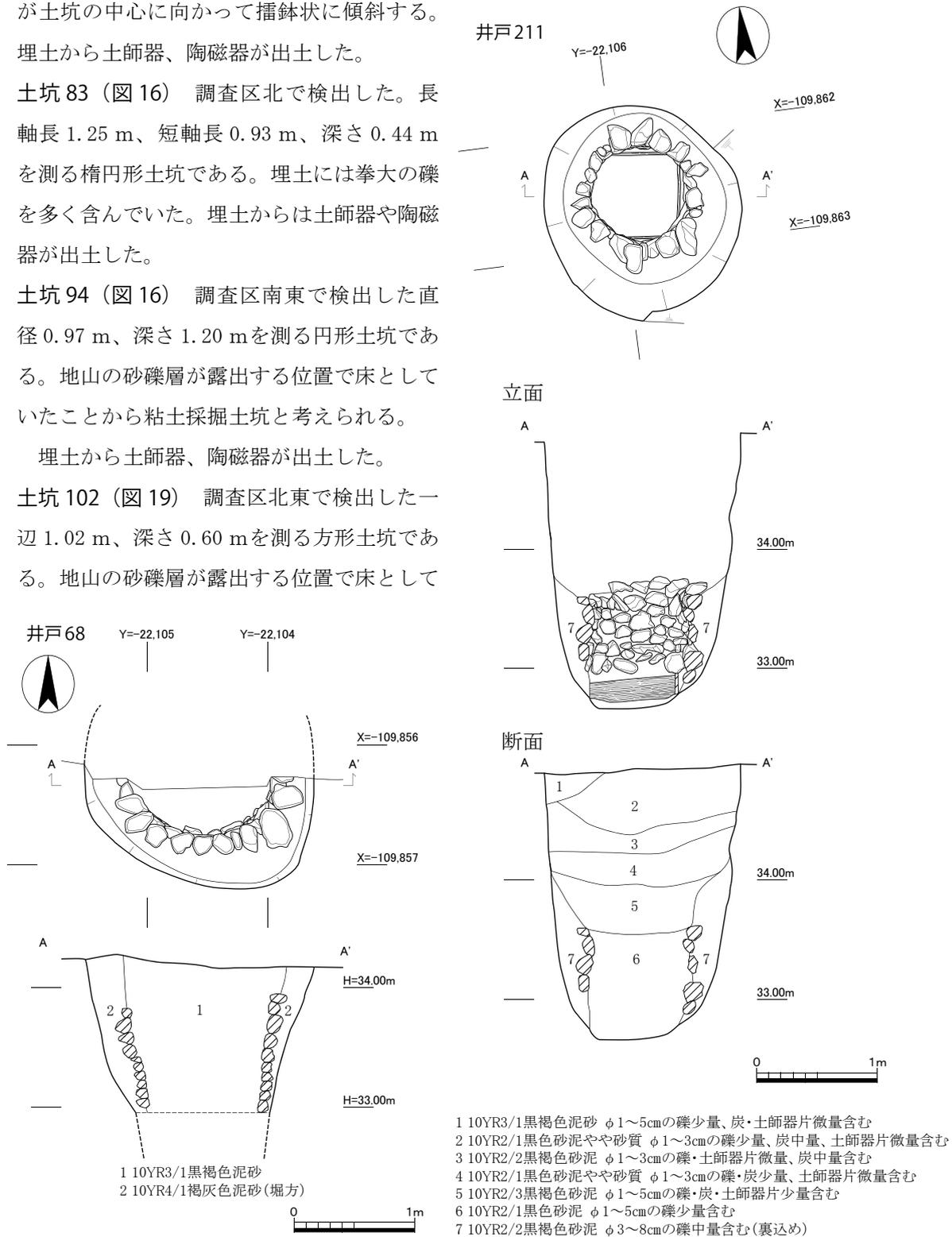


図17 井戸 68・211 実測図 (1 : 50)

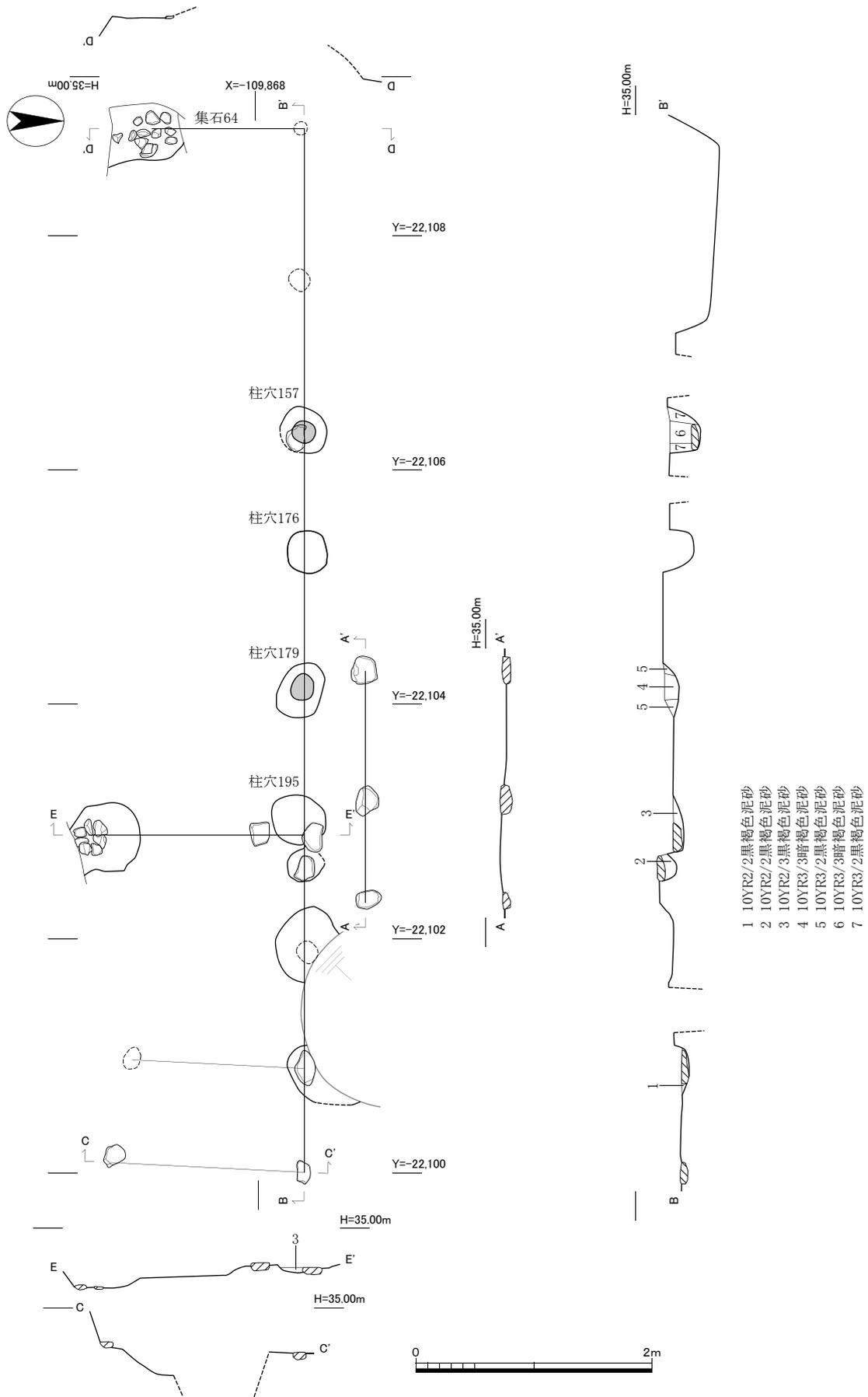
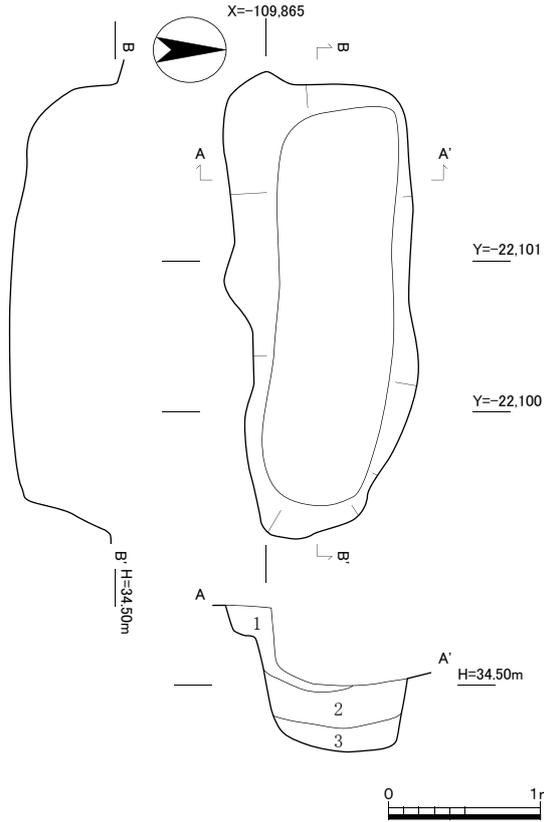


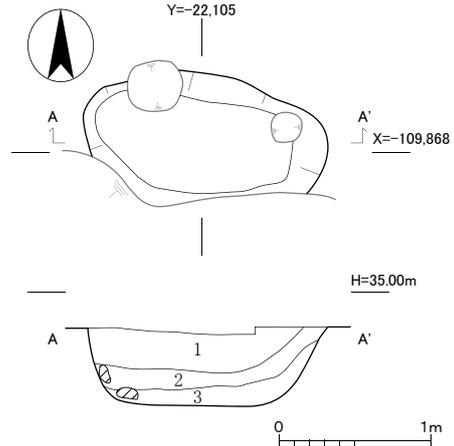
图18 建物2 实测图 (1 : 50)

土坑15



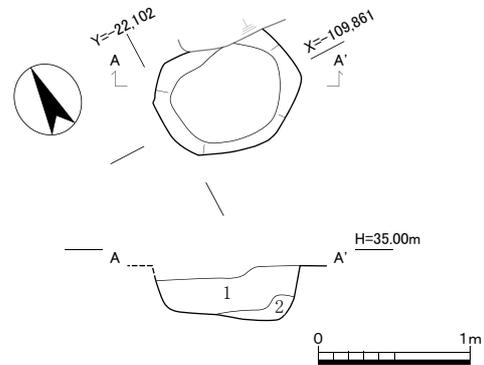
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト 炭・焼土中量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘質土 炭・焼土多量含む
- 3 10YR3/1黒褐色泥砂 しまり弱い

土坑120



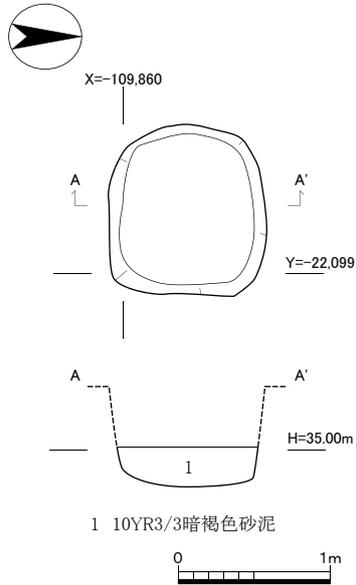
- 1 10YR6/3にぶい黄橙色泥砂 2.5Y6/2灰黄色泥砂ブロック含む
- 2 10YR3/2黒褐色シルト 炭・土師器片多量含む
- 3 10YR6/4にぶい黄橙色泥砂

土坑151



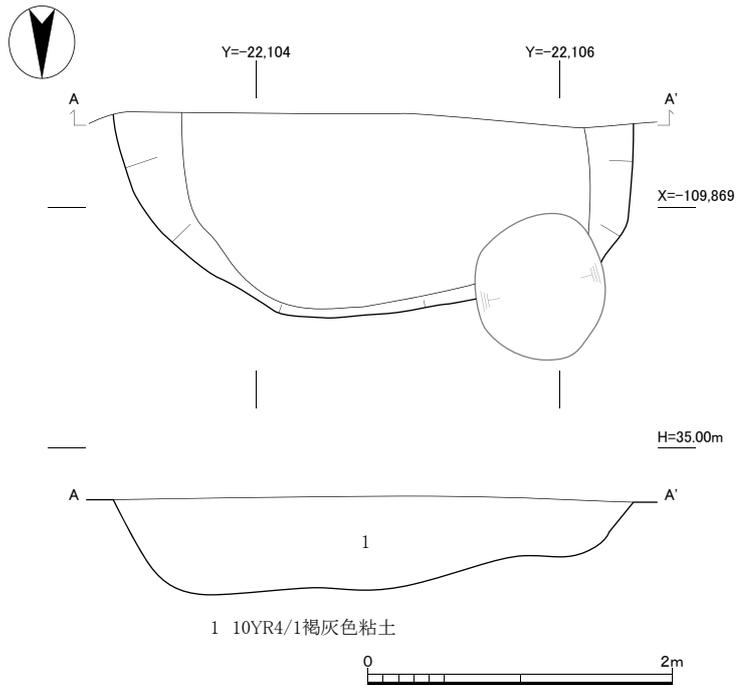
- 1 10YR2/2黒褐色砂質シルト 焼土中量、黄褐色粘質土ブロック多量含む
- 2 2.5Y6/1黄灰色泥砂 炭化物多量含む

土坑102



- 1 10YR3/3暗褐色砂泥

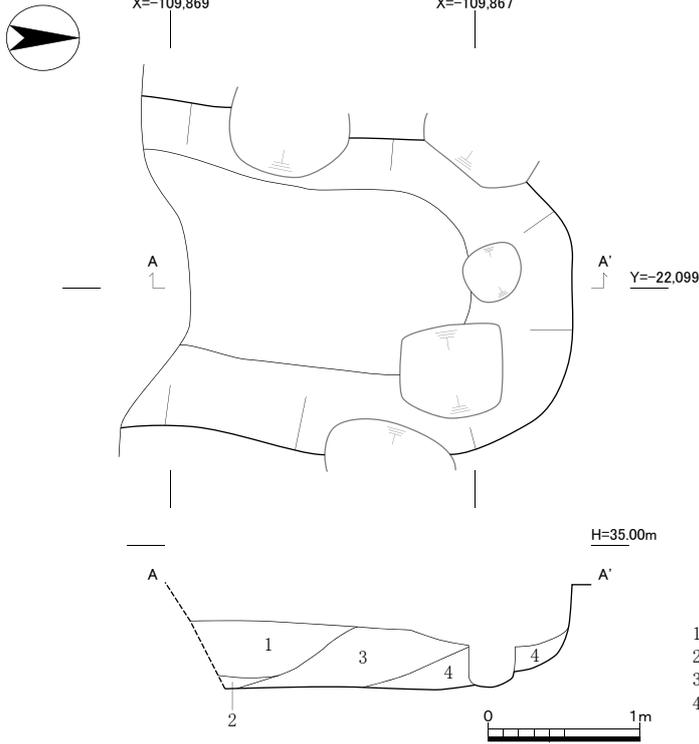
土坑235



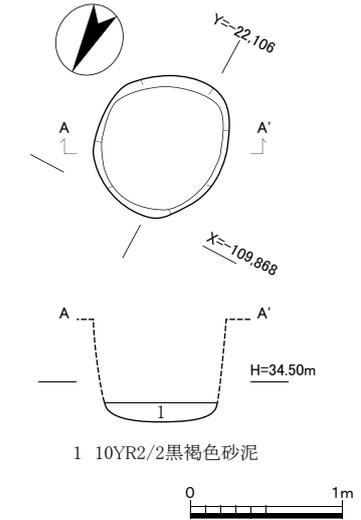
- 1 10YR4/1褐灰色粘土

図19 土坑 15・102・120・151・235 実測図 (1 : 50)

土坑207

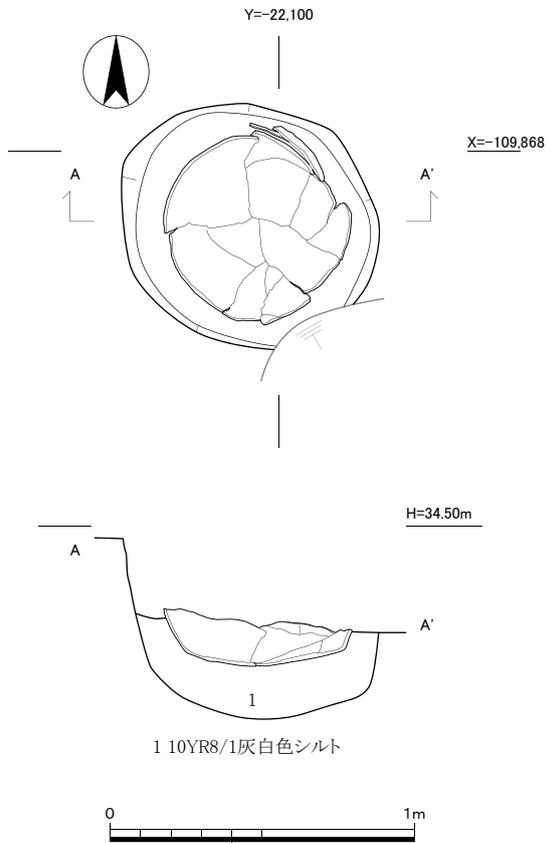


土坑236



- 1 10YR2/2黒褐色砂泥
- 1 10YR3/4暗褐色泥砂 黄褐色砂泥ブロック少量含む
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 φ5~7cmの礫多量含む
- 3 10YR3/3暗褐色泥砂
- 4 10YR3/3暗褐色泥砂 炭多量含む

埋甕210



埋甕258

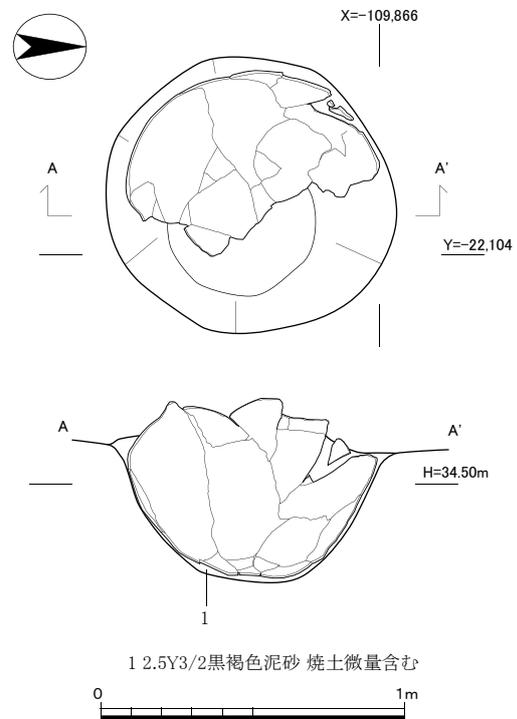


図20 土坑 207・236、埋甕 210・258 実測図 (1 : 50、1 : 25)

いたことから粘土採掘土坑と考えられる。

埋土から土師器、陶磁器が出土した。

土坑 120 (図 19) 調査区南で検出した、長軸長 1.65 m、短軸長 0.97 m、深さ 0.60 m を測る長楕円形土坑である。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたため粘土採掘土坑と考えられる。

埋土から多量の土師器が一括して廃棄された状態で出土した。

土坑 133 (図 16) 調査区南東で検出した一辺 1.02 m、深さ 0.88 m を測る方形土坑である。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたことから粘土採掘土坑と考えられる。

埋土から土師器、多量の陶器が出土した。

土坑 151 (図 19) 調査区中央で検出した短軸長 0.79 m、長軸長 0.94 m、深さ 0.35 m を測る楕円形土坑である。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたため粘土採掘土坑と考えられる。

埋土から土師器、多量の陶磁器が出土した。

土坑 235 (図 19) 調査区南端で検出した東西長 3.40 m、南北検出長 1.35 m、深さは 0.61 m を測る楕円形土坑である。土坑 236 が土坑 235 を壊している。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたことから粘土採掘土坑と考えられる。

埋土から土師器、陶磁器が出土した。

土坑 236 (図 20) 調査区南で検出した短軸長 0.83 m、長軸長 0.94 m、深さは 0.70 m を測る円形土坑である。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたことから粘土採掘土坑と考えられる。埋土から土師器が多量に出土した。

土坑 253 (図 16) 調査区西端で検出した、中央に小土坑があり巨大な掘方をもつ土坑である。中央土坑は南北長 1.01 m、東西検出長 0.97 m を測る方形で、深さは 0.44 m を測る。床面は平坦で固く締まる。埋土には木質片を少量含む。掘方は南北長 4.01 m、東西検出長 2.70 m、深さは検出面から 1.44 m を測る略方形である。調査区西側に延長しており確定できなかったが、井戸の可能性が考えられる。

埋土から土師器、陶磁器が少量出土した。

柱穴 302 (図 16) 調査区中央、試掘トレンチ床面で検出した直径 0.53 m、深さ 0.22 m を測る柱穴で、床面に一辺 0.22 m の瓦製の磚を据えている。礎板として利用されていたと考えられるが、対応する柱穴を確定することができなかった。

埋土から遺物の出土は磚のみであった。

(e) 3面の遺構（平安時代～鎌倉時代・室町時代）

平安時代から室町時代までの遺構群である。2面と同一面で検出し、埋土が大きく異なることから掘り分けた遺構群である。調査区南東部や中央部でわずかに灰黄橙色シルト質土の整地が残存していた (図 21)。

建物 3 (図 23) 調査区中央東側で検出した礎石建物である。礎石は一辺が 0.13 ～ 0.23 m の扁平な川原石で、柱穴が掘りこまれている。東西に2間以上、南北に2間以上と考えられる。柱間は東西方向で 1.60 m ～ 2.19 m を測り、南北方向で 1.56 m ～ 2.02 m を測る。

井戸 63 (図 22) 調査区南で検出した。井戸の掘方は長径 2.47 m を測る楕円形である。後世の遺

構に大きく破壊され、南半分は調査区外である。井戸の深さは約 2.5 m である。埋土からは土師器が若干出土した。

井戸 275 (図 24) 調査区北西隅で検出した縦板組横棧留井戸である。井戸枠は一辺 1.25 m、深さ 0.62 m を測る。井戸枠の一辺に 7 枚の縦板を並べ、横方向に留めた棧木が確認できた。井戸枠の隅に柱となった木材の痕跡も確認した。木枠は朽ちてほとんど原形をとどめておらず、縦板は木質が薄く残っていただけであった。棧木、隅柱も朽ちており、繋ぎ部分などの詳細は不明であった。井戸枠の底は深さ 0.22 m の楕円形土坑があり、床面で地山の砂礫層が露出していた。掘方は二段落ちになっており、南北長 4.04 m、東西検出長 2.86 m を測る掘方と井戸枠の底の高さに合わせた南北長 3.03 m、東西検出長 1.65 m を測る楕円形の掘方があった。掘方の埋土は青灰色シルトブロックを多量に含んだ緑灰色シルトであった。

井戸枠内埋土や掘方から土師器や瓦、陶器が出土した。

土坑 207 (図 20) 調査区南端で地業 26 埋土を除去して検出した、南北検出長 2.88 m、東西長 2.13 m、深さは 0.66 m を測る長楕円形土坑である。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたことから粘土採掘土坑と考えられる。

埋土から土師器、陶磁器が出土した。

土坑 256 (図 23) 調査区中央で検出した土坑である。東西長 2.26 m、南北長 3.80 m を測るやや不整形な長方形で、深さは 0.63 m を測る。地山の砂礫層が露出する位置で床としていたことから粘土採掘土坑と考えられる。

埋土から土師器、陶磁器が出土した。

土坑 248 (図 21) 調査区南東で検出した方形小土坑である。短軸長 0.37 m、長軸長 0.42 m を測る。

埋土から土師器、石製品が少量出土した。

土坑 250 (図 21) 調査区南で検出した楕円形土坑である。短軸長 0.70 m、長軸長 0.72 m、深さ 0.55 m を測る。

埋土から土師器、石製品が少量出土した。

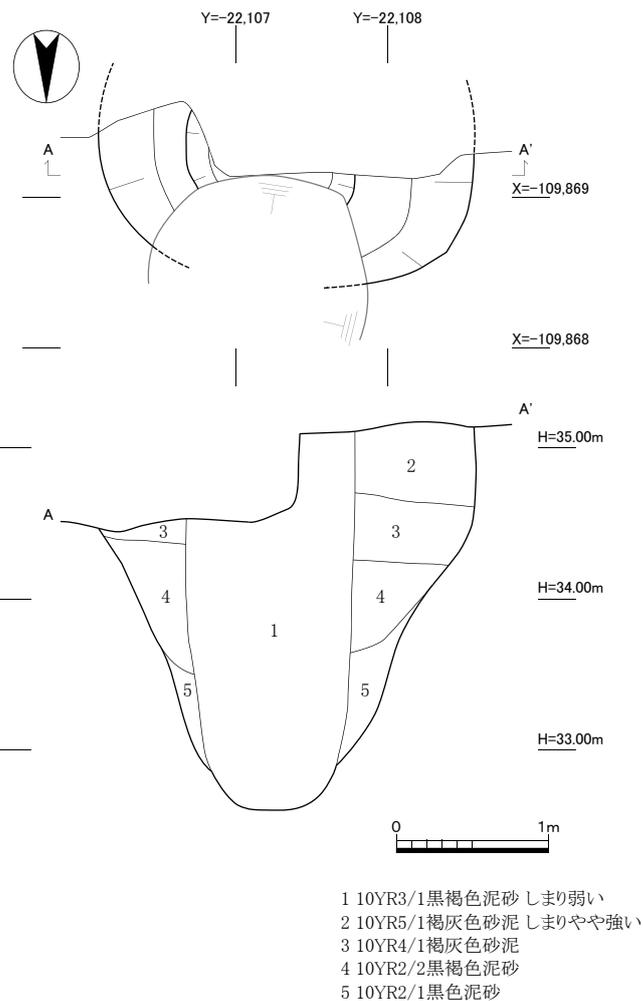
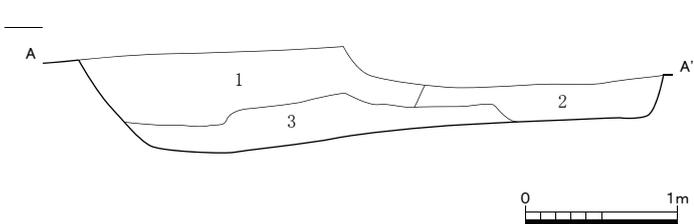
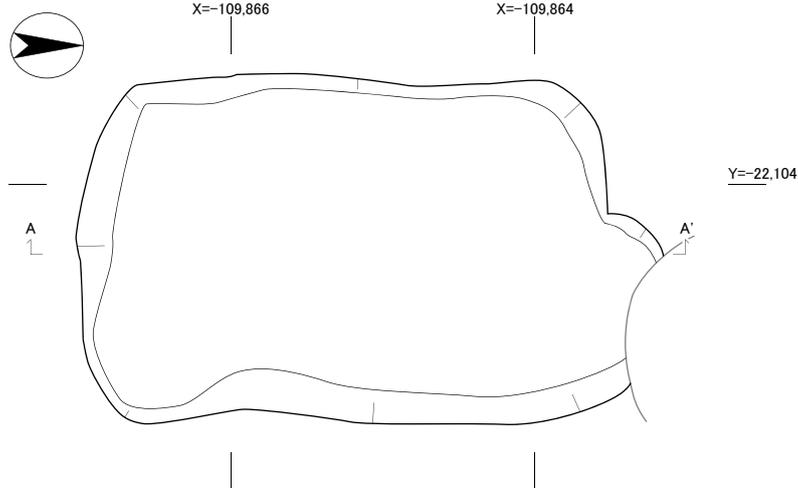


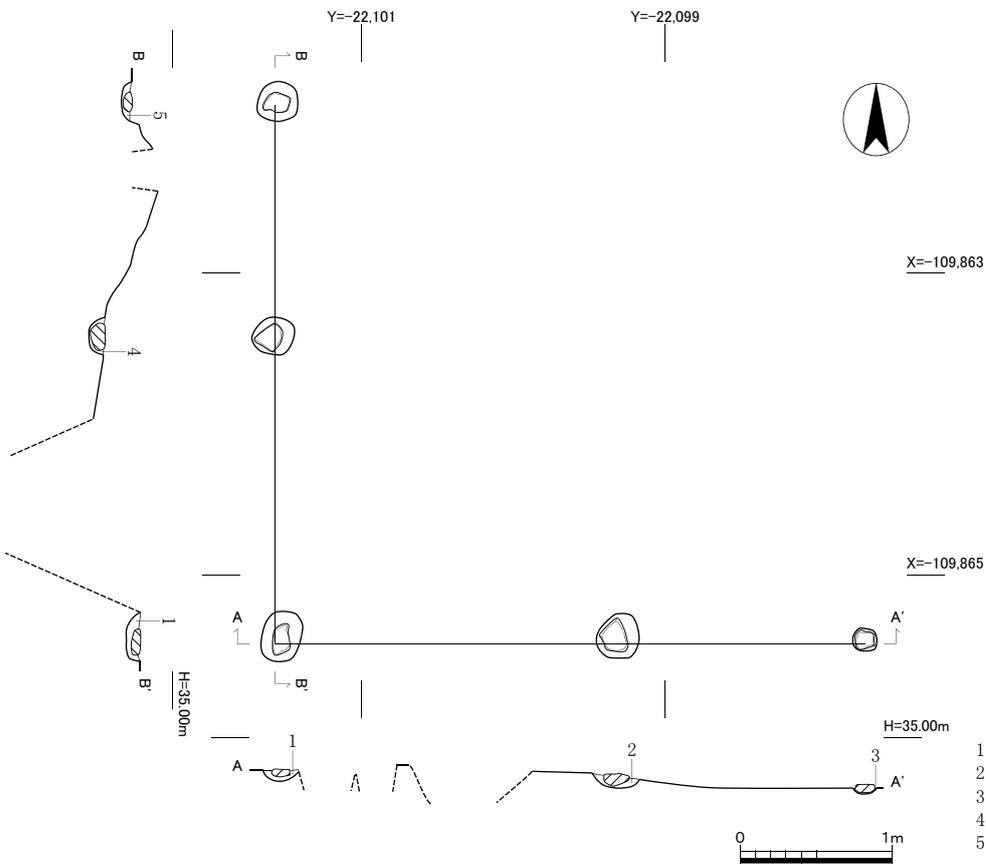
図22 井戸 63 実測図 (1 : 50)

土坑256



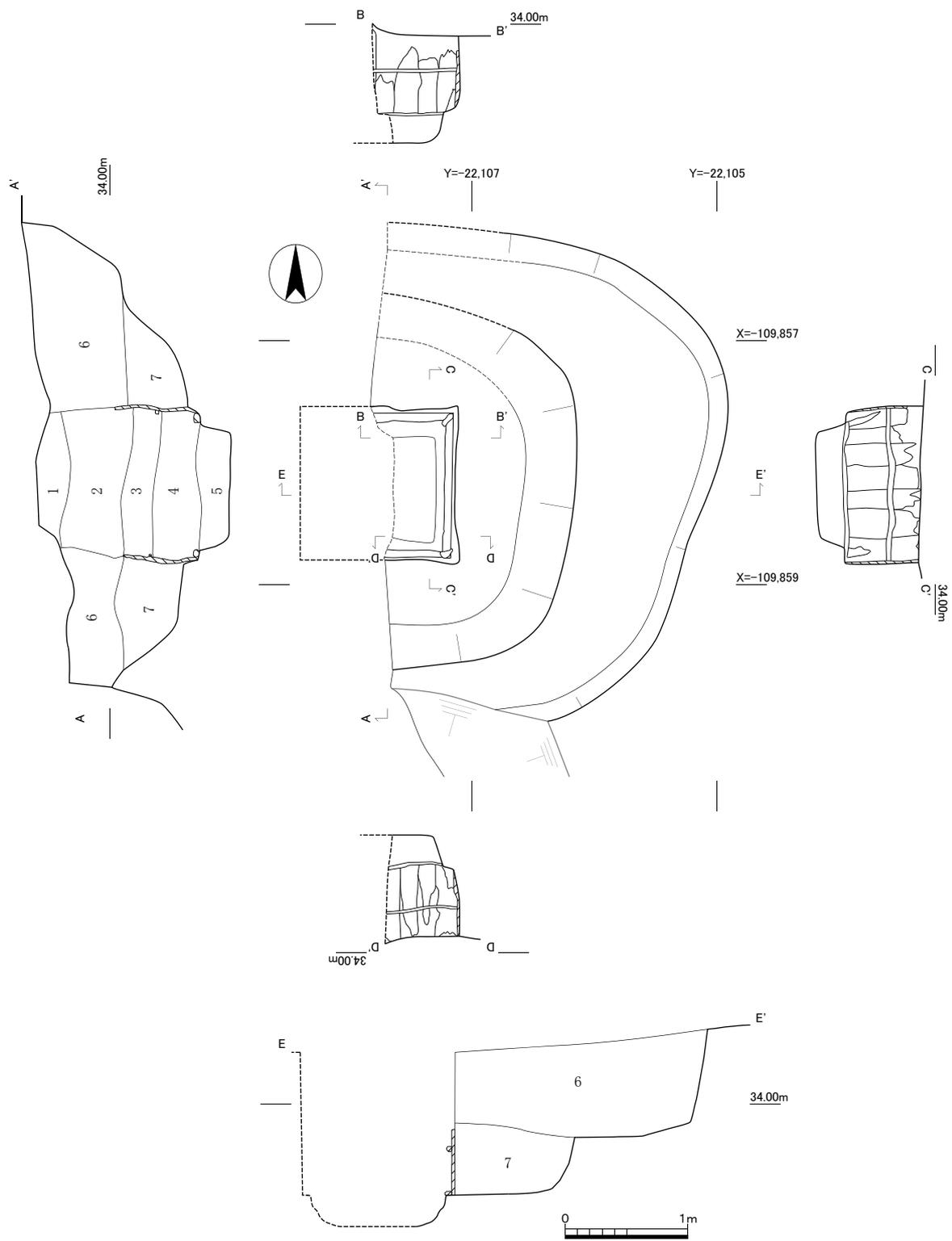
- H=35.00m
- 1 2.5Y3/2黒褐色泥砂
φ 1~3cmの礫・土師器片微量、
炭中量、焼土少量含む
 - 2 2.5Y3/2黒褐色泥砂
しまり強い
 - 3 10YR2/2黒褐色砂泥
φ 1~3cmの礫・炭・焼土・土師器片
微量含む

建物3



- H=35.00m
- 1 10YR2/2黒褐色砂泥
 - 2 10YR2/2黒褐色砂泥
 - 3 10YR3/3暗褐色泥砂
 - 4 10YR3/3暗褐色泥砂
 - 5 10YR3/2黒褐色砂泥

図23 土坑 256・建物 3 実測図 (1 : 50)



- 1 2.5Y4/1黄灰色泥砂
- 2 10YR4/1褐色泥砂
- 3 2.5Y4/1黄灰色泥砂 φ 5~8cmの礫少量含む
- 4 10YR3/2黒褐色泥砂 φ 3~7cmの礫少量含む
- 5 2.5Y3/1黒褐色泥砂
- 6 7.5GY5/1緑灰色シルト φ 2~4cmの礫中量含む
- 7 2.5Y3/2黒褐色泥砂

図24 井戸 275 実測図 (1 : 50)

4. 遺物

(1) 土器

(a) 平安時代以前 (図 25)

平安時代の遺構に混入していた遺物を掲載する。1は縄文土器の鉢である。口縁内面に沈線を2条施す。縄文時代後期である。7は古式土師器の甕である。口縁部内面が肥厚し、体部内面はケズリ調整で薄く仕上げる。古墳時代前期である。1は土坑 253、7は井戸 275 から出土した。

井戸 275 (図 25) 2～4は土師器皿である。2・3は皿 A、4は皿 N である。5は灰釉陶器の碗である。6は白色土器の高坏である。5・6は井戸の掘方から出土した。出土した土師器皿は京都IV期である。

(b) 室町時代 (図 25～27・29)

土坑 120 (図 25) 8～25は土師器皿である。8・9は皿 Sh、10・24・25は皿 S、11～23は皿 N である。10は燈明皿である。14～23は左右非対称で歪みが著しい。26は青磁の輪花皿である。27は須恵質陶器の鉢である。出土した土師器皿は京都IX期古段階である。

土坑 207 (図 25) 28～34は土師器皿である。28・29は皿 Sh、32～34は皿 S、30・31は皿 N である。35・36は瓦質土器である。35は鍋、36は羽釜である。37は須恵質陶器の鉢である。東播産である。38・39は焼締陶器の甕である。38は備前産、39は常滑産である。出土した土師器皿は京都IX期古～中段階である。

土坑 256 (図 26) 40～53は土師器皿である。40・46～52は皿 S、41～43は皿 Sh、44・45・53は皿 N である。46は燈明皿である。54は青磁碗である。55は瓦質土器の鍋である。56は須恵質陶器の片口鉢である。東播産である。57は焼締陶器の甕である。常滑産である。58はミニチュア土器で、

表3 遺物概要

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代以前	縄文土器、古式土師器		縄文土器1点、古式土師器1点		
平安時代	土師器、白色土器、灰釉陶器、陶器、須恵器、瓦		土師器3点、灰釉陶器1点、白色土器1点、瓦4点(軒瓦1点)		
室町時代	土師器、輸入磁器、瓦質土器、須恵器、瓦、金属製品		土師器110点、青磁7点、白磁3点、青花2点、瓦質土器10点、須恵質陶器3点、焼締陶器8点、施釉陶器3点、瓦1点、硯4点、砥石4点、石臼1点、蓋1点、水晶3点、鋳型1点、金属製品7点、銭22点		
江戸時代	土師器、磁器、陶器、焼締陶器、瓦、金属製品		磁器2点、瓦質土器1点、石臼1点、埴塼1点、金属製品2点、銭5点		
合計		53箱	213点(10箱)	2箱	41箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。また、大型遺物2点は5箱分として計上している。

羽釜である。出土した土師器皿は京都IX期中～新段階である。土坑 256 から出土した遺物には京都 VII期の遺物が混入していた。

井戸 68 (図 26) 59・60 は土師器皿である。59・60 は皿 N である。61 は青磁碗である。簡略化した蓮弁紋を陰刻する。出土した土師器皿は京都IX期新段階～京都X期古段階である。

土坑 102 (図 26) 62～68 は土師器皿である。62～64 は皿 N、65～68 は皿 S である。69・70 は

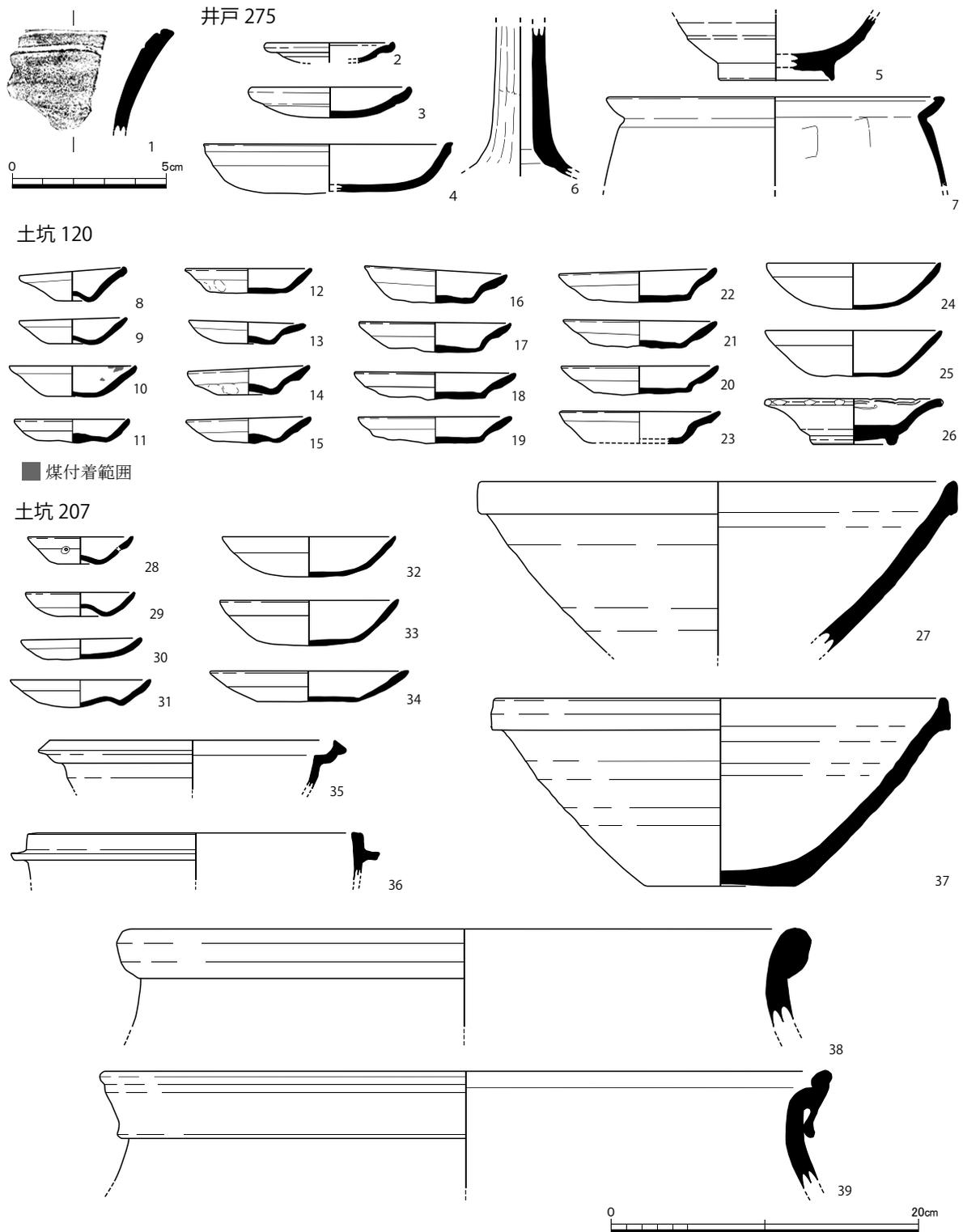


図25 出土遺物実測図1 (1 : 2、1 : 4)

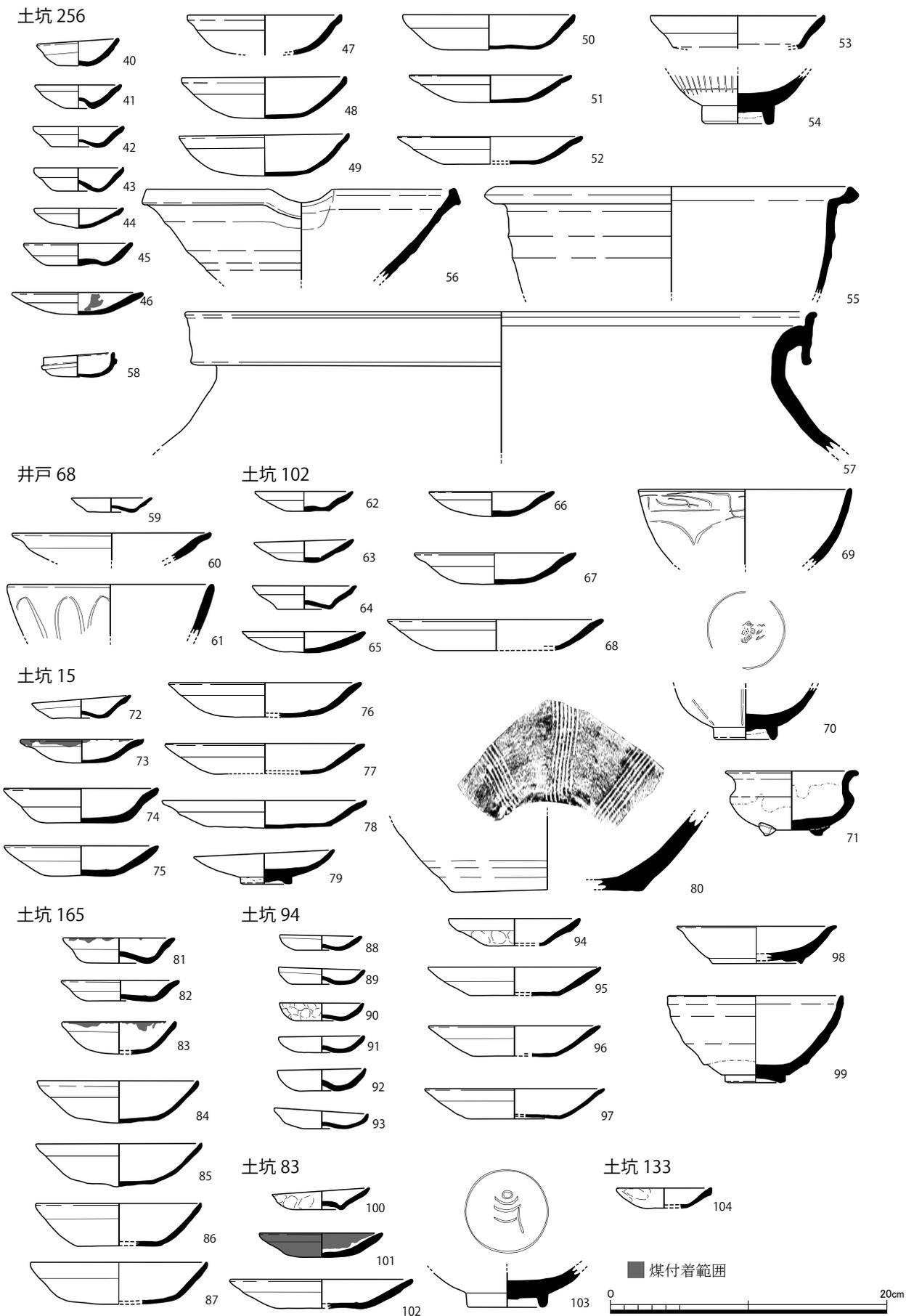


图26 出土遺物実測図2 (1 : 4)

青磁の碗である。69は簡略化した雷紋と蓮弁紋を陰刻する。70は見込みに花卉紋を陰刻する。71は施釉陶器の香炉である。瀬戸産か。出土した土師器皿は京都IX期中～新段階である。

土坑 15 (図 26) 72～78は土師器皿である。72・74は皿 N、73は皿 Sb、75～78は皿 Sである。79は白磁の皿である。80は焼締陶器の播鉢である。間隔を開けた7条一単位の播目を施す。信楽産である。出土した土師器皿は京都IX期新段階～X期古段階である。

土坑 165 (図 26) 81～87は土師器皿である。81・82は皿 N、83～87は皿 Sである。81・83は燈明皿である。出土した土師器皿は京都VII期新段階～VIII期中段階である。

土坑 94 (図 26・29) 88～97は土師器皿である。88～93は皿 Nr、94は皿 N、95～97は皿 Sである。98・99は国産施釉陶器である。98は灰釉平皿で全体に貫入が入る。99は天目茶碗で、生地に鉄釉を施す。見込みに擦痕が顕著に残る。98・99は美濃産である。151は瓦質土器の風炉である。円柱形の三脚で底部に円孔を穿つ。胴部上半で強く肩を張る。口縁部は穿孔の痕跡がある。出土した土師器皿は京都IX期新段階～X期中段階である。

土坑 83 (図 26) 100～102は土師器皿である。100は皿 N、101・102は皿 Sである。101は燈明皿である。103は青磁碗である。見込みに幾何学紋を陰刻する。出土した土師器皿は京都IX期新段階～X期中段階である。

土坑 133 (図 26・29) 104は土師器皿である。152は焼締陶器の甕である。備前産である。出土した土師器皿は京都X期である。

井戸 211 (図 27) 105～114は土師器皿である。105～108は皿 N、109～114は皿 Sである。107～109は燈明皿である。115・118は白磁である。115は皿である。体部下半から高台にかけて抉りを四方から施す。118は壺の底部である。116は土師器の鍋である。117は焼締陶器の播鉢である。信楽産である。119～121は瓦質土器の火鉢(火舎)である。119は強く被熱して表面のカーボンが剥離している。120は方形口縁の火鉢で、口縁部外面に渦状スタンプ紋を巡らす。121は装飾脚部である。120と同一個体か。出土した土師器皿は京都IX期新段階～X期古段階である。

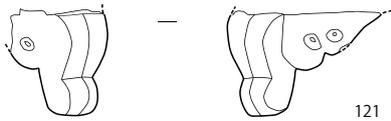
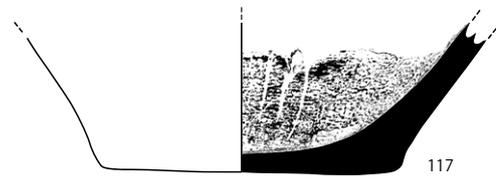
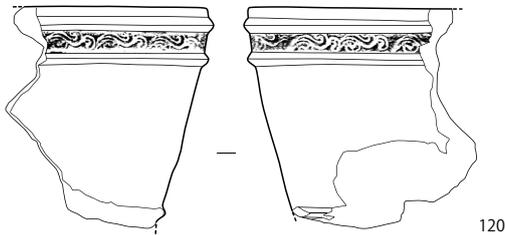
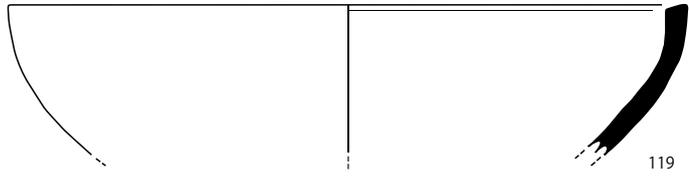
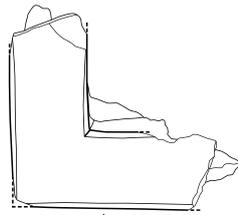
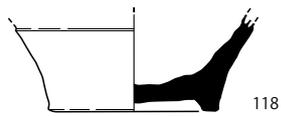
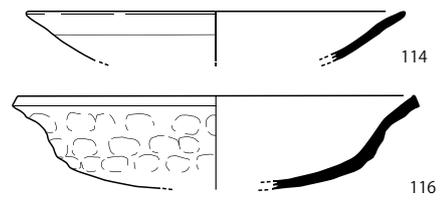
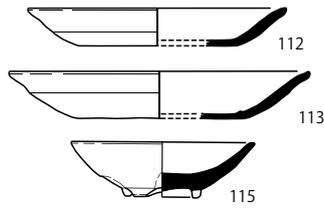
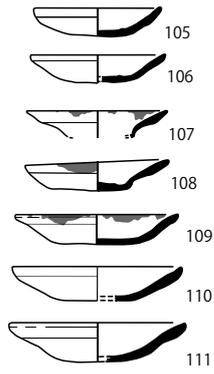
土坑 151 (図 27) 122～131は土師器皿である。122～128は皿 Nr、129～131は皿 Sである。129は燈明皿である。132は輸入磁器で、青花の碗である。口縁が大きく直線的に開き、外面全体に草花紋を描き、見込みには圏線の中央に大きく草花紋を描く。畳付に砂目積痕が残る。明代。出土した土師器皿は京都X期中～新段階である。

土坑 29 (図 27) 133～140は土師器皿である。133～138は皿 Nr、139・140は皿 Sである。136・140は燈明皿である。141・142は瓦質土器である。141は鉢で、142は不明品である。142は円筒形で、外面に2条の突帯を貼り付け、丁寧に磨いている。出土した土師器皿は京都X期新段階～XI期古段階である。

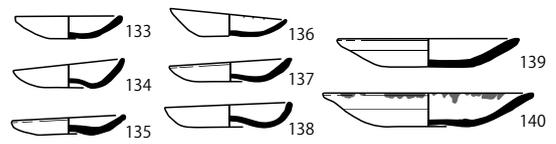
土坑 71 (図 27) 143は土師器皿である。出土した土師器皿は京都IX期新段階か。

地業 26 (図 27) 144～146は土師器皿である。144・145は皿 Nr、146は皿 Sである。147は青磁の碗である。148は青花の碗である。外面を六分割した枠内に飛翔する馬をそれぞれに描く。見込みには二重圏線と菱形紋を中心に如意頭紋を四方に配する。内面は印花で円の中に大振りな宝相華紋を四等分に配し、間を菱形紋で埋める。口縁端部は外面の染付に合わせて輪花状になる。器壁が薄い。明代か。出土した土師器皿は京都X期中～新段階である。

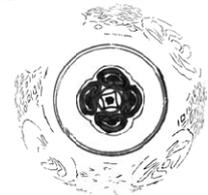
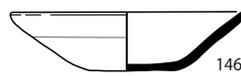
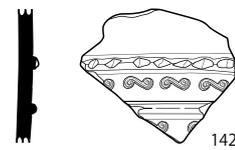
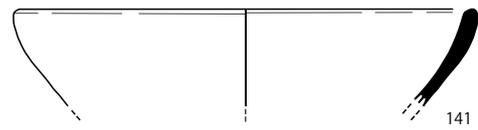
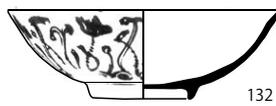
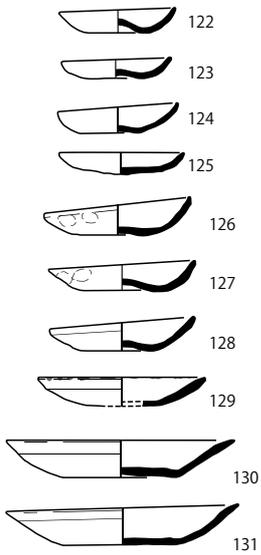
井戸 211



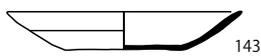
土坑 29



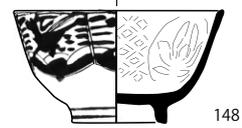
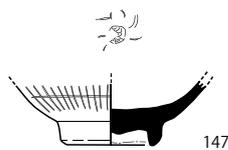
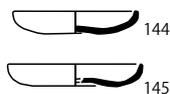
土坑 151



土坑 71



地業 26



■ 煤付着範囲



図27 出土遺物実測図3 (1:4)

埋甕 210 (図 29) 153 は焼締陶器の甕の底部である。備前産である。15 世紀代か。

埋甕 258 (図 29) 154 は焼締陶器の甕である。体部に押印を 2 条巡らす。信楽産である。15 世紀代か。

埋甕 28 (図 29) 155 は瓦質土器の壺である。室町時代か。

(c) 江戸時代 (図 28・29)

室 4 (図 28) 149・150 は国産磁器で、蓋付きの合子である。149 は蓋である。口径は 6.8cm である。天井に「三味薬調合所」「加州」と呉須で書く。裏面には「亀田」と同じく呉須で書く。150 は体部外面に「金澤犀川宮竹屋亀田伊右衛門」と時計回りに呉須で書かれている。被熱による融着で入れ子に 2 個体融着している。歪みが激しいがほぼ同様の形状とみられ、外側が口径 8.0cm、内側が口径 6.8cm である。加賀産の白磁である。別個体としてもう 1 点出土している。江戸時代後半である。

池 3 (図 29) 156 は瓦質土器の火鉢である。半球形の胴部に三足の短い丸足がつく。底部中央に三か所の円孔がある。黄褐色シルト層に正位に据えてあったため、池の魚溜りとして転用されたものとする。

(2) 鑄造関連遺物 (図 30)

鑄 1 は坩堝である。小型で全面が融着している。取っ手が欠損している。池 3 構築土の下層から出土した。鑄 2 は柄鏡の鑄型土台である。表面の溝には鑄型に使用した真土が付着している。鑄 2 は地業 47 から出土した。室町時代～江戸時代前半であると考えられる。

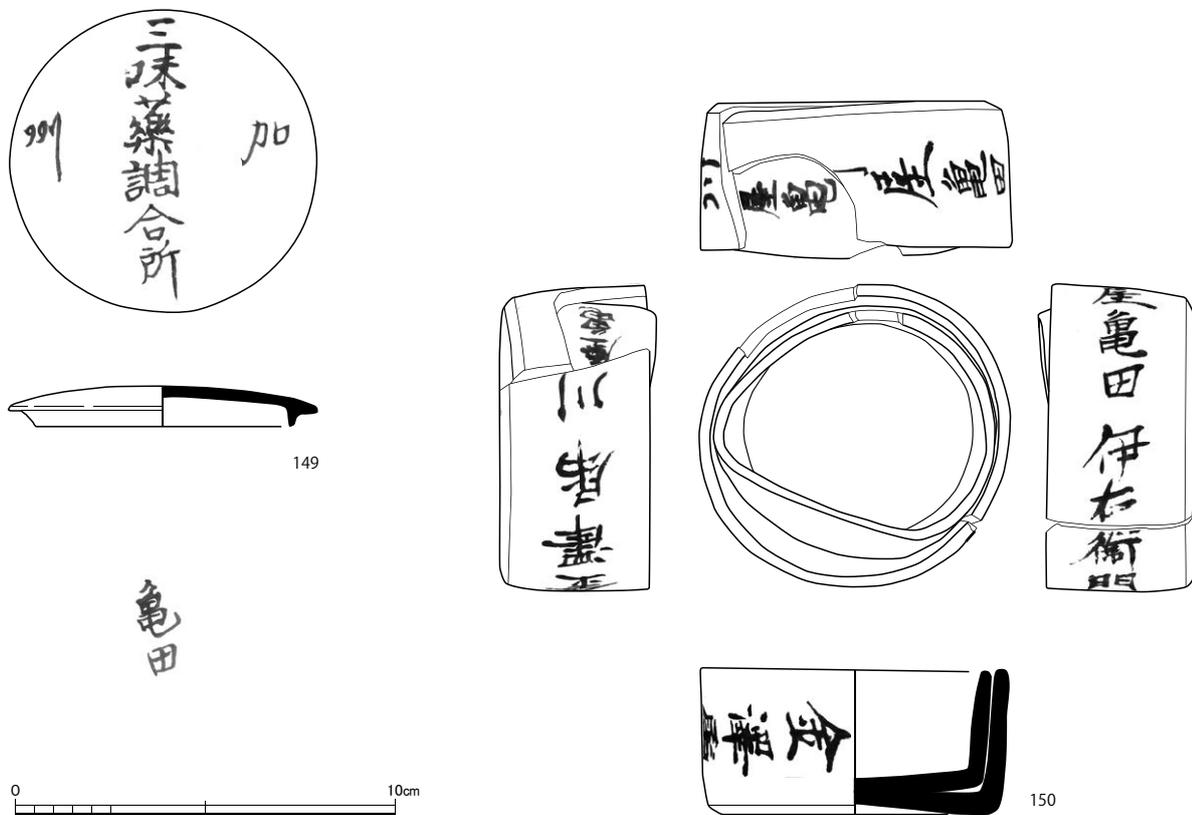


図 28 出土遺物実測図 4 (1 : 2)

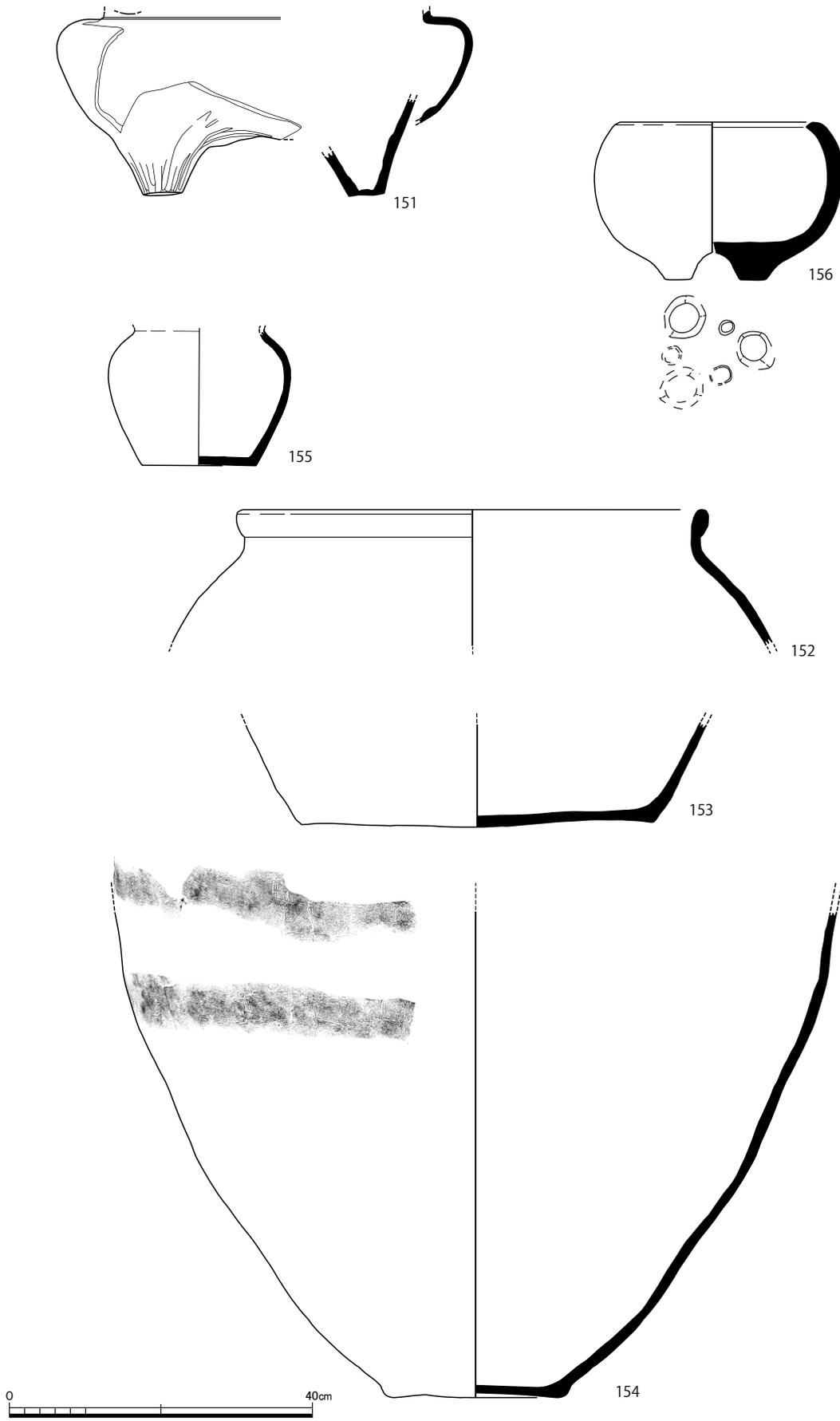


图29 出土遗物实测图5 (1 : 8)

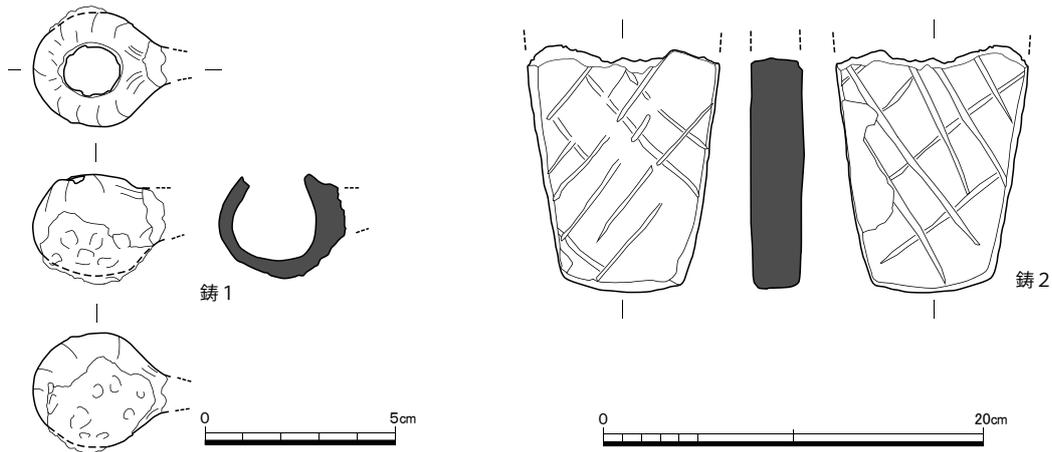


図30 出土遺物実測図6 (1:2、1:4)

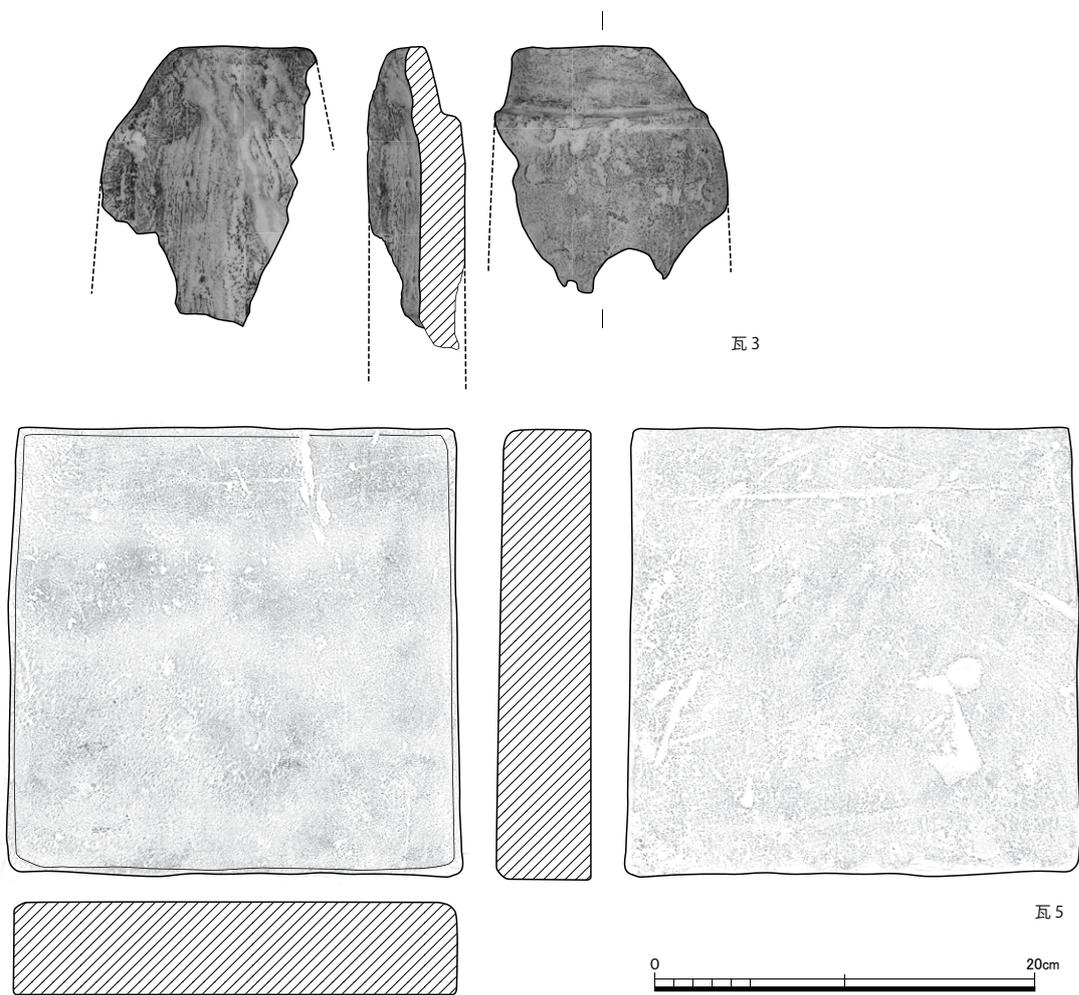


図31 出土遺物実測図7 (1:4)

(3) 瓦製品 (図31・32)

瓦1は軒平瓦である。瓦当は半裁花紋で花卉1枚を中心とした紋様を上下に反転しながら並べている。外区に珠紋が3個単位で確認できるが、連続して配置されていない。剥離しているが、剥離面の観察から無段の顎であると考えられる。瓦3・4は丸瓦である。瓦4は凸面に縦方向の縄目叩き痕が観察できる。瓦2は平瓦である。凸面に縦方向の縄目叩き痕、凹面に布目が観察できる。平

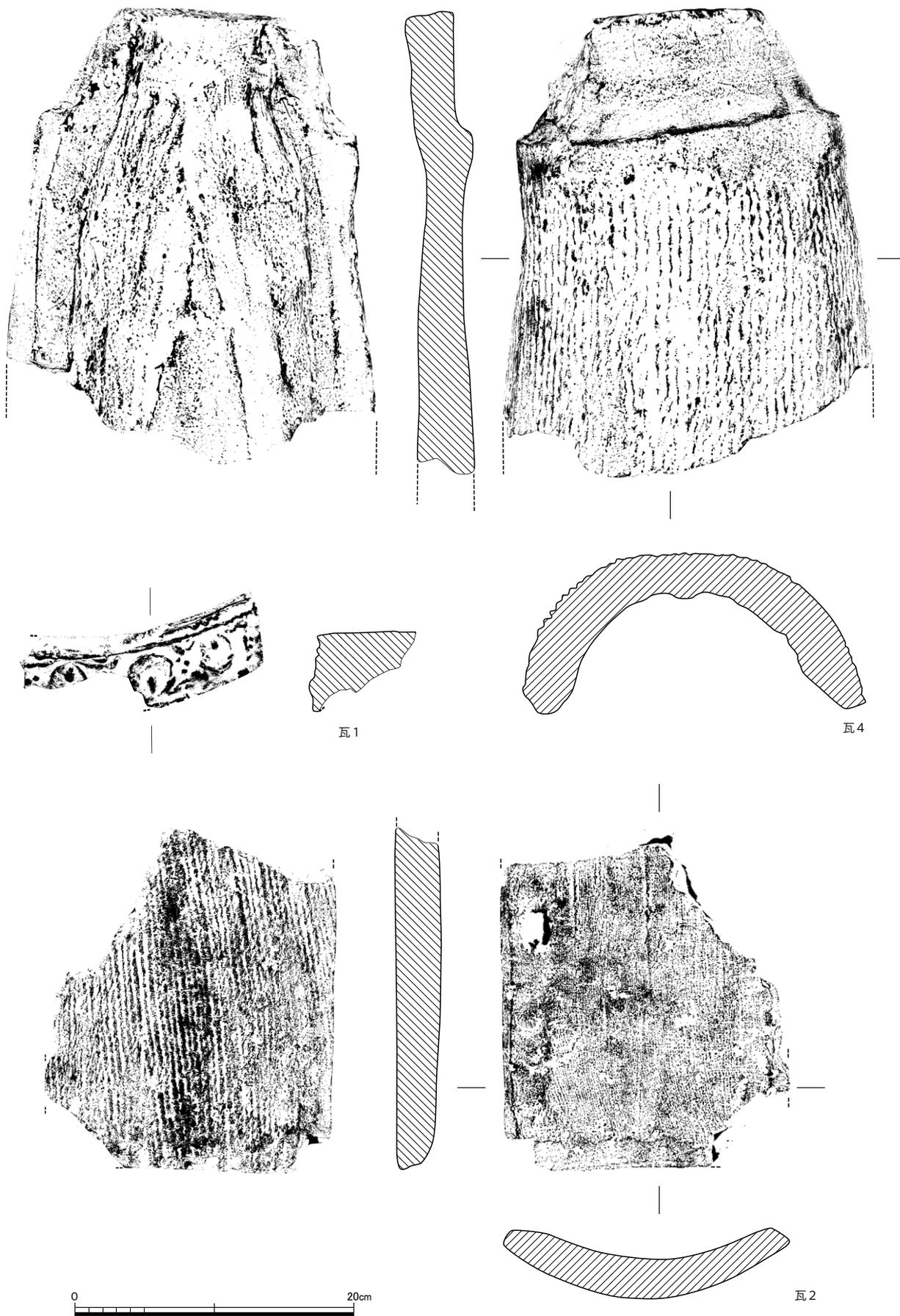


图32 出土遗物实测图8 (1 : 4)

安時代中期である。瓦1～4は井戸275から出土した。瓦5は磚である。柱穴302から出土した。出土状況から礎板として転用されていたと考えられる。

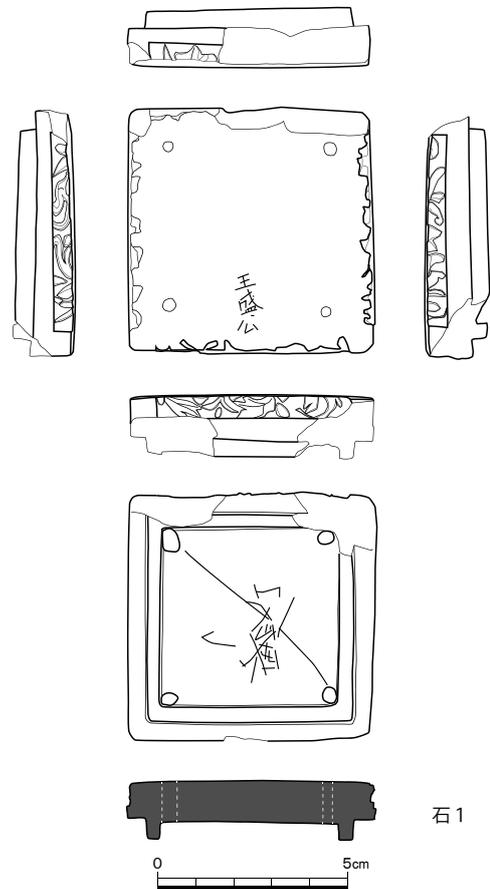
(4) 石製品 (図33・34)

石1は蓋である。6cm四方の方形で天井部は平坦で、裏面に返しを削り出している。四方の側面には草紋のレリーフを緻密に削り出している。返しの四隅に円形の穿孔がある。表面には加工時の条痕が多く残るが、「王盛公」と極細の線で陰刻されている。裏面にも不規則な条痕が残るが文字の認識ができない。灰白色で、流紋岩系の石材である。土坑15から室町時代の遺物とともに出土した。

石2～5は硯である。石2は小型の硯である。丘部を持たず平坦で海部は楕円形にくぼむ。頁岩製である。土坑94から出土した。石3は硯面が楕円形で自然石の形を残している。半分以上欠損している。頁岩製である。土坑93から出土した。石4・5は硯面が平面台形である。石5は丘部に細い溝状の凹みがある。石4は土坑29から、石5は土坑102から出土した。ともに頁岩製である。

石6～9は砥石である。石6・7は厚さ3cm以下の砥石である。石6は表と裏に深い溝と浅い溝が1条ずつある。頁岩製で鳴滝産と考えられる。土坑102から出土した。石7は溝が2条あり、溝内がよく使用されている。頁岩製で鳴滝産である。集石118から出土した。石8・9は大型の砥石で、石8は幅3cmの幅広い溝が2条ある。石9は幅0.3～0.7cmの溝が4条ある。石8は土坑207から、石9は土坑29から出土した。ともに砂岩系である。

石10・11は石臼である。石10は上臼で、上面に直径2.2cmの円孔をあける。下面は中央に軸受けの穴をもち、側面に挽手を差し込む穴をもつ。礎石46として地業47に据えられていた。花崗岩製である。石11は下臼で、上面に播目を刻む。被熱が著しく赤化している。室4から出土した。花崗岩製である。石12～14は水晶である(図版12)。大きさは2.5～4.2cmで粗く剥離させている。石12は柱穴212、石13・14はピット247から出土した。ともに室町時代の遺物と共伴して出土した。



(5) 金属製品 (図35・36)

金属1・4・7は飾り金具である。金属1は下地は銀と銅の合金である四分一^{しぶいち}であり、鍍金は金箔である。紋様は錆が浸食しているため、不明瞭である。土坑235から出土した。金属4は菱形の銅板で縁は雲形に加工している。表面・裏面ともに錆が進行しているため紋様は見られない。土坑94から出土した。金属7は先端が宝珠型をしており、片側を雲形に加工している。途中で折れているが長軸11.5cm、短軸4.5cmである。錆と木片が

図33 出土遺物実測図9 (1:2)

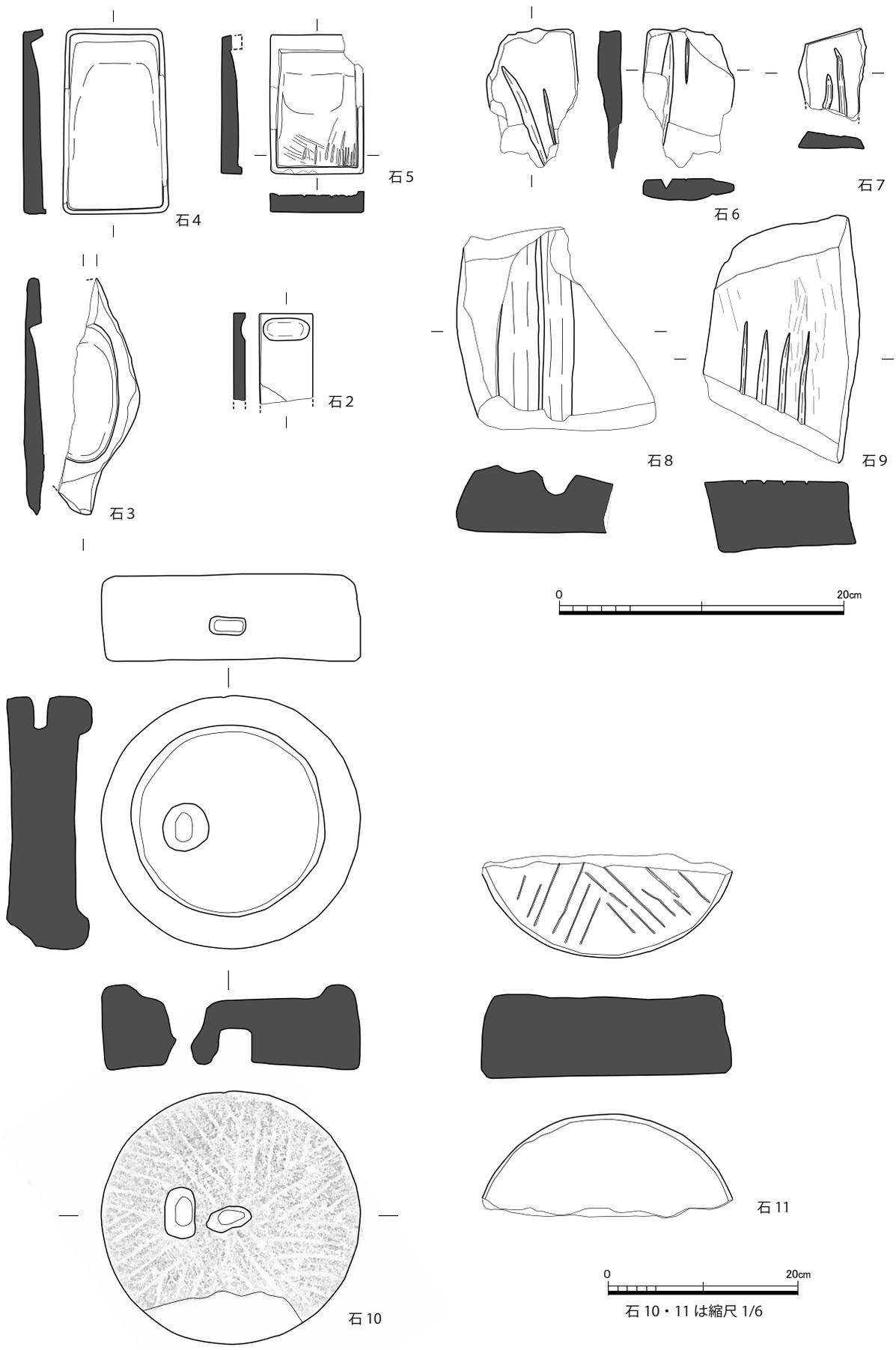


図34 出土遺物実測図10 (1 : 4、1 : 6)

多量に付いており、紋様は見られない。土坑 102 から出土した。

金属 2 は金属皿である。口径は 10.9cm の円形であり、小さな取っ手のようなものが付いている。金属ヘラ（金属 3）と付いた状態で出土した。下地は青銅製であり、皿の内部は水銀朱が塗布されている。室 4 から出土した。金属 3 は金属ヘラである。金属 2 と同じで下地は青銅製であり、ほとんどはがれてしまっているが水銀朱が確認された。

金属 5 は金属棒である。長さ 6.5cm で両端が尖っている。青銅製と考えられる。土坑 15 から出土した。金属 6 は青銅製の釘である。長さ 4.9cm であり、釘の頭は円形で胴は四角である。頭には溶接痕のようなものが見られる。地業 26 から出土した。

金属 8 はメダル状の銅製品である。表面には王冠と布目状のような紋様が見られる。土坑 15 から室町時代の遺物とともに出土した。金属 9 は古銭に似た青銅製品である。室町時代の遺構検出中に出土した。

金属 10 ～ 36 は古銭である。10 は初鑄が唐代の開元通宝である。11 ～ 26 は初鑄が宋代の銅銭である。27 ～ 29 は初鑄が明代の銅銭である。30 ～ 34 は江戸時代が初鑄の寛永通宝である。35・36 は破損しているため判別ができなかった。10 ～ 13・15 ～ 29・35・36 は室町時代の遺物とともに出土した。14・30 ～ 34 は江戸時代の遺物とともに出土した。

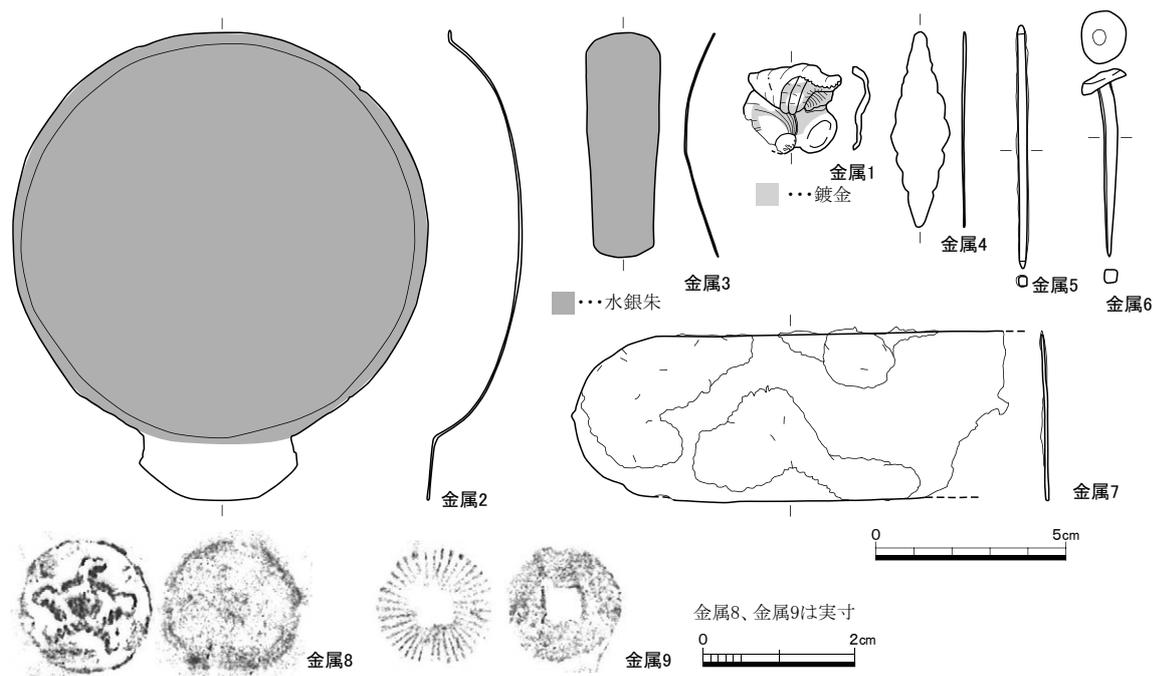


図35 出土遺物実測図 11・拓影図 1 (1 : 2、1 : 1)

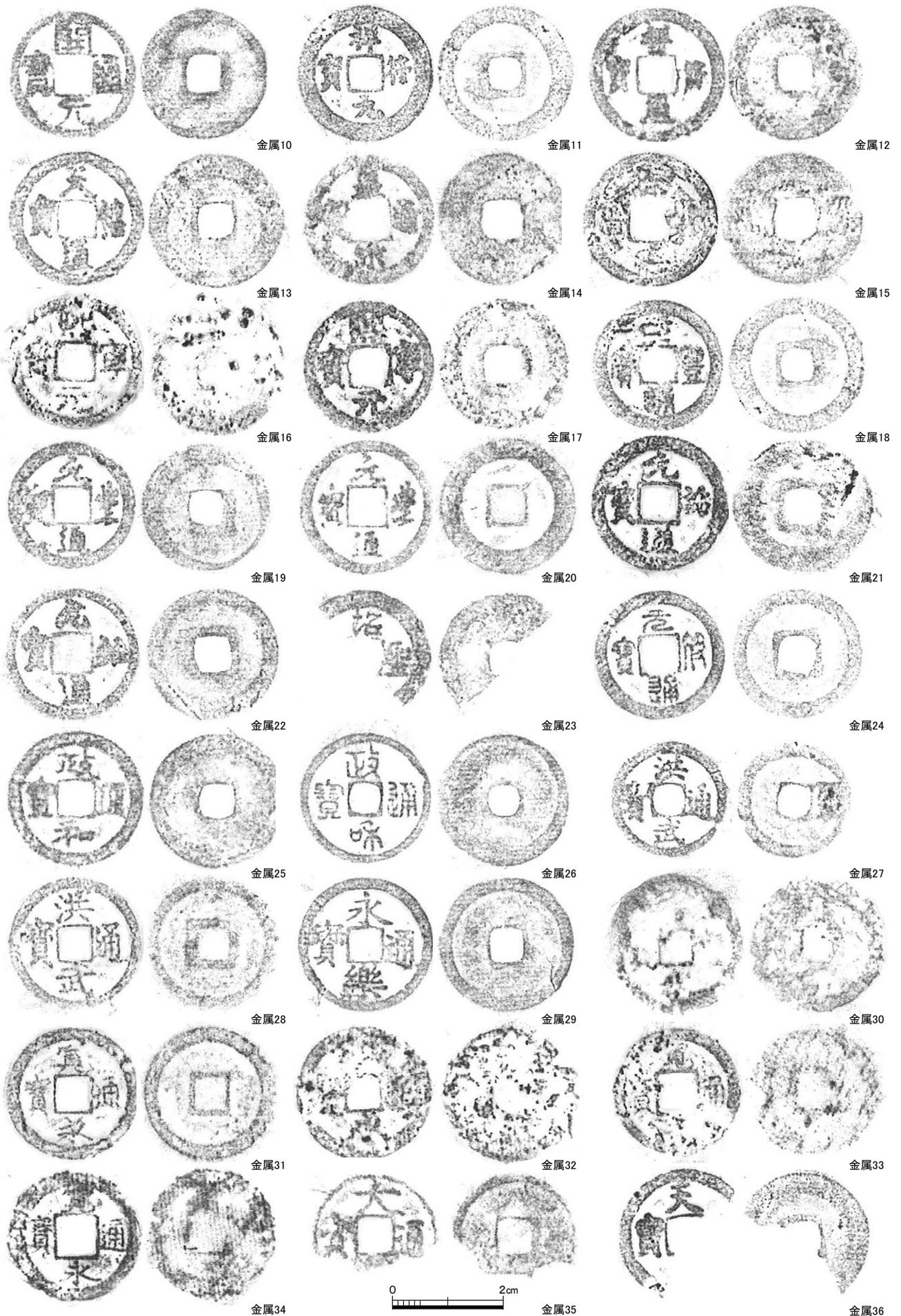


图36 出土遺物拓影图2 (1 : 1)

5. 科学分析

今回科学分析を行うにあたり蛍光 X 線分析装置（島津製作所製 EDX-7000）で測定を行った。分析条件は大気中で分析時間が 60 秒、コリメータ径は分析対象物の大きさによって 0.3 mm～1 mmの間で変更している。分析器の特徴としては真空状態での測定が難しいので軽元素の測定には不向きであるが、小型で短い測定時間でも重元素の測定を行うことができる。

金属 1(飾り金具) 鍍金が確認できる部分と地金と思われる部分の分析を行った。鍍金部分は Au(金)が 69.4%、Ag(銀)が 12.5%検出されたため金と銀の合金で鍍金を行ったと考えられる。地金部分は Ag が 44.8%、Cu(銅)が 33.1%検出されたため銀と銅の割合から四分一しぶいちと呼ばれる合金であると考えられる。

金属 2(金属皿) 金属皿表面に付着している赤色部分と地金部分の表面と背面の分析を行った。赤色部分は Cu が 51.2%検出され、Hg(水銀)が 20.0%検出された。Cu は地金部分の分析でも検出されているため地金の成分と考えられる。よって赤色部分は水銀の影響が現れているのではないかと考えられる。地金部分は表面で Cu が 57.1%、Sn(スズ)が 18.9%、Pb(鉛)が 15.4%検出され、背面では Cu が 89.3%検出されている。背面のほとんどの範囲が銅の錆が広がっているため、銅が多く検出されたと考えられる。表面の成分から銅、スズ、鉛の合金である青銅製と考えられる。

金属 7(銅製板状飾り金具) 破損している断面部分の分析を行った。周辺の錆を分析している可能性はあるが純銅製品であると考えられる。

金属 8(メダル状の銅製品) 紋様がある面を表面とし、分析を行った。表面は Cu が 87.3%と成分の大半を占めているのに対し、背面は Cu のほかに Pb や Sn が検出された。背面は別の金属製品が接合していた可能性が考えられる。

金属 27(洪武通寶) 表面と背面の分析を行った。金属 27 は背面に「一銭」と書かれている。青銅製品は Cu-Sn-Pb もしくは Cu-Pb-Sn の含有率の順になっていることが多いが今回の分析では Pb が最も多く含まれており、Cu、Sn の順となっている。金属 27 は鉛を多く含んでいるため純度の低い青銅製品と考えられる。

表 4 科学分析結果一覧 1

金属 1		
分析対象	含有元素	含有率(%)
金属1 鍍金部分	Au	69.4
	Ag	12.5
	Si	6.9
	Hg	4.4
	Cu	3.0
	Ca	1.8
金属1 地金部分	Ag	44.8
	Cu	33.1
	Cl	11.0
	Au	4.7
	P	1.9
	Br	1.9

金属 2		
分析対象	含有元素	含有率(%)
金属2 赤色付着部	Cu	51.2
	Hg	20.0
	S	13.4
	Si	6.1
	Ca	3.5
	P	2.6
	Sn	1.4
金属2 地金部分表面	Cu	57.1
	Sn	18.9
	Pb	15.4
	S	6.7
金属2 背面	Cu	89.3
	Cl	5.2
	P	3.2

金属 7		
分析対象	含有元素	含有率(%)
金属7	Cu	99.2

金属 8		
分析対象	含有元素	含有率(%)
金属8 表面	Cu	87.3
	P	8.5
	Ca	1.6
金属8 背面	Cu	37.4
	Pb	22.5
	Si	10.1
	P	8.3
	Sn	6.7
	Al	5.1
	Ca	2.7
	Cl	2.5
	As	1.6
	K	1.3

金属 27		
分析対象	含有元素	含有率(%)
金属27 表面	Pb	32.2
	Cu	22.0
	Sn	14.5
	Si	9.8
	Pb	8.9
	Ca	6.0
	Fe	4.8
	Cl	1.3
金属27 背面	Pb	34.6
	Cu	22.4
	Sn	20.8
	Si	9.7
	P	5.9
	Ca	2.1
	Fe	1.7
	Cl	1.1
Zn	1.0	

金属 32、金属 33(寛永通寶) どちらも表面のみの分析を行った。金属 32・33 ともに Cu が最も多く検出され、次いで Pb の順になっている。金属 32 は Cu、Pb、Sn が含まれており Fe(鉄) 以外に金属性の元素が確認できないので青銅製品と考えられる。金属 33 は鑄の部分进行分析した影響と考えられるが Cu と Pb が多く検出され Sn が 0.7%と微量に検出された。

金属 36(天口通寶) 表面のみ分析を行った。半分に割れているため銭種の判別はできなかった。Pb が 27.8%と最も多く Cu、Sn の順になっている。比率は違うが金属 27 と似たような分析結果になった。Fe が含まれているが青銅製と考えられる。

今回の分析の結果、小型の分析器でも分析対象や分析条件によっては金属の分析を行うにあたり十分な結果を得られることが判明した。金属 1 は出土したときは鍍金が施された銅製品と考えられていたが、銀と銅の合金である四分一と判明した。金属 2 は赤い付着物は水銀朱であることが判明した。金属 27 は背面に「一銭」の文字が見られ、摸鑄銭の可能性は低いと考えていたが、純度の低い青銅製だったため、摸鑄銭の可能性が低くても純度の高い青銅製とは限らない可能性があることが判明した。その他の金属については分析資料を増やし傾向を観察していくことが必要で今後の課題である。

表 5 科学分析結果一覧 2

金属 32・33

分析対象	含有元素	含有率(%)
金属32	Cu	38.3
	Si	21.4
	Pb	17.9
	Fe	5.7
	Al	4.7
	Sn	3.5
	Ca	3.0
	P	1.6
	K	1.2
	As	1.1
金属33	Cu	60.1
	Pb	17.7
	Ca	8.4
	Si	6.4
	P	4.4
	Sn	0.7

金属 36

分析対象	含有元素	含有率(%)
金属36	Pb	27.8
	Cu	25.6
	Sn	15.1
	Si	8.4
	P	8.1
	Ca	7.9
	Fe	2.3
	Cl	2.2
	K	1.2

6. まとめ

(1) 遺構の変遷

今回の調査では縄文時代から江戸時代の遺構・遺物を確認した。

縄文時代の土器は後世の遺構に混入しており、遺構に伴うものではなかった。平安時代中期は方形縦板組横棧留井戸 275 があるが、建物などを復元することはできなかった。鎌倉時代から室町時代前半まで遺構は確認できず、室町時代後半の土坑群を調査区全体で検出した。シルト質の地山を掘りぬいており、互いにほとんど重複していないものが多いことから粘土採掘坑であると考えられる。当地は中世京都の下京の北限にあたり、宅地としての利用はなかったようである。しかし粘土採掘坑を埋め戻した後に造成整地した痕跡（地業 26・47）があり、室町時代の末期から江戸時代の初頭にかけて宅地化が始まったとみられる。江戸時代後半では巨大な石を使用した地下室（室 2・4）がある。これらの地下室は特異な造りをしており、室 2 では三和土で設えた浅いタライ状のものを地下室の角に置く。室 4 は壁面に巨大な石を利用し、また床面の西側では浴槽のようなものや集水桝などを三和土と切石によって造作している。室 4 の東隣には池 3 が設置され、南側では台形状に屈曲する溝が付属すると考えられる。

(2) 「金澤犀川宮竹屋亀田伊右衛門」銘の白磁合子について

宮竹屋は金沢を代表する豪商で、四世勝豊は松尾芭蕉の門人となるほどの文化人でもあった。明暦 3（1657）年に薬種商を始め、三代目伊右衛門の時に三味薬（しせつ ぎ ぼまんびょうえん うさいえん紫雪、耆婆萬病園・烏犀園）の製造・販売を許された。この「三味薬」は徳川本家、尾張徳川家および前田家の三家にのみ伝わる秘薬で、もともと文禄の役で福島正則や宇喜多秀家が朝鮮から持ち帰った医学書を基にして製造されたとされる。

江戸時代後期、宮竹屋七世純蔵は御典医荻野元凱や青木木米ら京都の文化人と交流を深め薬種販売網も広げていった。この頃まで薬は「包み」に入れられていたが、「三味薬」の容器を広めるため焼き物の容器へと変容した。小松若杉窯で天保 7（1836）年ごろに磁器合子の生産が始まったとされ、初期のものは貫入が多く入り黒ずんでおり次第に白磁化できるようになったという。室 4 から出土した合子は被熱によってかなり歪んでいるが口径を復元すると、内径で 6.8cm と 8.0cm の二種が入れ子状になっており、それぞれ石川県内で確認できる製品と比較すると大と特大のサイズに当てはまる。蓋は内径が 6.8cm で大サイズに合う。合子の側面には「金澤犀川宮竹屋亀田伊右衛門」とあり、蓋には「三味薬調合所」「加州」、裏には「亀田」とあり真っ白な製品である。小松若杉窯後期の合子の特徴である。同様の合子が同志社大学構内で出土している。同志社大学構内で出土した合子は大サイズで、銘は今回出土した合子と同一であるが、底部に「□□ 三十六□」と墨書がある。

ところで江戸時代後期頃の宮竹屋の「薬取次所店札」には「三条通室町角 京都 鍵屋友年」とある。文献からは明確な場所の特定ができなかったため検討の余地はあるが、ほぼ調査地が室町通に面し三条通りはすぐ南であること、室 2 や室 4 の特殊施設を考慮すると薬種商に関係する宅地であった可能性が考えられる。

参考文献

米澤義光 2011 『加賀ノ国 金澤犀川宮竹屋』

表6 出土遺物観察表

番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			調整技法	色調	備考	時代
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
1	土坑253	縄文土器	深鉢	—	(3.3)	—	外：ナデ 内：ナデ	暗黄褐色	混入品	縄文
2	井戸275	土師器	皿A	8.4	1.3	—	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ	灰黄褐色		平安
3	井戸275	土師器	皿A	10.6	2.0	3.0	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色		平安
4	井戸275	土師器	皿N	16.0	3.2	8.2	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色		平安
5	井戸275 掘方	灰釉陶器	碗	—	(4.3)	7.2	ロクロナデ	胎土：灰色 釉薬：灰色		平安
6	井戸275 掘方	白色土器	高杯	柱部 (4.0)	(9.8)	—	外：縦ミガキ 内：ナデ	淡黄褐色	脚部14面体中空柱状	平安
7	井戸275	土師器	甕	22.0	(5.8)	—	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ケズリ	灰黄褐色	布留甕。混入品。	古墳
8	土坑120	土師器	皿Sh	6.9	1.9	2.6	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	淡黄褐色		室町
9	土坑120	土師器	皿Sh	7.0	1.6	3.0	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	淡黄褐色		室町
10	土坑120	土師器	皿S	8.4	1.9	3.4	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	淡黄褐色	燈明皿	室町
11	土坑120	土師器	皿N	7.5	1.5	4.0	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
12	土坑120	土師器	皿N	8.2	1.6	5.0	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
13	土坑120	土師器	皿N	7.6	1.4	4.0	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
14	土坑120	土師器	皿N	8.0	1.7	3.8	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
15	土坑120	土師器	皿N	8.2	1.5	4.0	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
16	土坑120	土師器	皿N	9.6	2.2	5.5	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	にぶい黄褐色	底部に圧痕 胎土粗い	室町
17	土坑120	土師器	皿N	9.6	1.9	6.0	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	橙色	底部に圧痕 胎土粗い	室町
18	土坑120	土師器	皿N	10.0	1.8	6.4	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色	底部に圧痕 胎土粗い	室町
19	土坑120	土師器	皿N	10.0	1.7	5.8	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色	底部に圧痕 胎土粗い	室町
20	土坑120	土師器	皿N	10.0	1.7	6.0	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色	底部に圧痕 胎土粗い	室町
21	土坑120	土師器	皿N	10.2	2.0	5.5	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	橙色	底部に圧痕 胎土粗い	室町
22	土坑120	土師器	皿N	10.5	1.8	6.5	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	にぶい黄褐色	底部に圧痕	室町
23	土坑120	土師器	皿N	10.5	2.0	5.5	外：オサエ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色	底部に圧痕 胎土粗い	室町
24	土坑120	土師器	皿S	11.3	3.0	丸底	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
25	土坑120	土師器	皿S	11.5	3.0	5.0	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
26	土坑120	輸入磁器 青磁	輪花皿	11.4	3.0	4.8	ロクロナデ	胎土：赤橙色 釉薬：オリーブ 黄色	口縁内面に雲紋 口唇部 を等間隔にオサエ 底部 内面は露胎	室町
27	土坑120	須恵質陶器	鉢	31.0	(11.4)	—	ロクロナデ	灰色		室町
28	土坑207	土師器	皿Sh	7.0	1.8	2.6	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
29	土坑207	土師器	皿Sh	7.2	1.6	3.4	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
30	土坑207	土師器	皿N	8.0	1.4	4.0	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色		室町
31	土坑207	土師器	皿N	9.2	1.8	—	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色		室町
32	土坑207	土師器	皿S	11.4	2.7	4.8	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
33	土坑207	土師器	皿S	11.7	3.0	6.0	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
34	土坑207	土師器	皿S	12.8	2.0	6.2	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色		室町
35	土坑207	瓦質土器	鍋	20.0	(3.0)	—	外：ヨコナデ 内：板ナデ	灰色		室町
36	土坑207	瓦質土器	羽釜	21.9	(3.0)	—	外：ヨコナデ 内：板ナデ	灰色		室町

番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			調整技法	色調	備考	時代
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
37	土坑207	須恵質陶器	鉢	29.6	12.4	10.0	ロクロナデ	青灰色	東播産	室町
38	土坑207	焼締陶器	甕	44.6	(6.5)	—	ロクロナデ	褐色	備前	室町
39	土坑207	焼締陶器	甕	47.6	(7.7)	—	ロクロナデ	褐色	常滑	室町
40	土坑256	土師器	皿S	6.0	1.8	1.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
41	土坑256	土師器	皿Sh	6.2	1.7	2.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	淡黄橙色		室町
42	土坑256	土師器	皿Sh	6.5	1.5	3.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
43	土坑256	土師器	皿Sh	6.6	1.7	3.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
44	土坑256	土師器	皿N	6.4	1.5	尖底	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
45	土坑256	土師器	皿N	8.0	1.6	4.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
46	土坑256	土師器	皿S	9.6	1.6	丸底	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色	燈明皿	室町
47	土坑256	土師器	皿S	11.2	(2.9)	丸底	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
48	土坑256	土師器	皿S	12.0	3.0	4.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
49	土坑256 下層	土師器	皿S	12.4	3.0	3.6	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
50	土坑256	土師器	皿S	12.4	2.6	6.6	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
51	土坑256 下層	土師器	皿S	11.8	2.0	4.4	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
52	土坑256 下層	土師器	皿S	13.4	2.0	6.8	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
53	土坑256	土師器	皿N	12.6	(2.4)	—	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
54	土坑256 下層	輸入磁器 青磁	碗	—	(3.5)	4.8	ロクロナデ	緑灰色	鎬蓮弁紋か	室町
55	土坑256	瓦質土器	鍋	27.2	(7.7)	—	ロクロナデ	褐灰色	外面煤付着	室町
56	土坑256	須恵質陶器	片口鉢	22.4	(6.5)	—	ロクロナデ	灰白色	焼成やや軟質 東播産	室町
57	土坑256	焼締陶器	甕	45.8	(10.3)	—	ロクロナデ	褐色	常滑	室町
58	土坑256	土師器 ミニチュア	羽釜	5.2	1.5	2.4	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
59	井戸68	土師器	皿N	5.8	1.0	3.3	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	にぶい黄褐色	歪み激しい	室町
60	井戸68	土師器	皿N	14.4	(2.0)	—	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
61	井戸68	輸入磁器 青磁	碗	15.0	(3.8)	—	ロクロナデ	胎土:白灰色 釉薬:薄緑色	体部外面に簡略な蓮弁紋	室町
62	土坑102	土師器	皿N	7.0	1.5	3.6	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
63	土坑102	土師器	皿N	7.2	1.6	2.0	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
64	土坑102	土師器	皿N	7.6	1.7	3.8	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
65	土坑102	土師器	皿S	8.9	1.5	—	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
66	土坑102	土師器	皿S	9.0	1.8	—	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
67	土坑102	土師器	皿S	11.8	2.3	5.0	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
68	土坑102	土師器	皿S	15.6	2.2	8.8	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
69	土坑102	輸入磁器 青磁	碗	15.6	(5.5)	—	ロクロナデ	胎土:白灰色 釉薬:オリーブ 黄色		室町
70	土坑102	青磁	碗	—	(3.8)	4.0	ロクロナデ	胎土:白灰色 釉薬:緑色	体部外面に鎬紋、見込みに 花卉紋を陰刻	室町
71	土坑102	国産陶器 瀬戸・美濃	香炉	9.6	4.7	5.0	ロクロナデ 底部糸切痕	胎土:黄褐色 釉薬:褐色		室町
72	土坑15	土師器	皿N	7.2	1.5	3.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	にぶい黄褐色	歪み激しい	室町
73	土坑15	土師器	皿S b	8.9	1.7	4.0	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	橙色	燈明皿	室町

番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			調整技法	色調	備考	時代
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
74	土坑15	土師器	皿N	11.2	2.5	5.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、板ナデ	黄褐色		室町
75	土坑15	土師器	皿S	11.2	2.2	5.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
76	土坑15	土師器	皿S	14.0	2.5	5.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色	焼成やや軟質	室町
77	土坑15	土師器	皿S	14.4	2.2	7.5	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
78	土坑15	土師器	皿S	14.8	2.0	9.6	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
79	土坑15	白磁	皿	10.2	2.5	4.0	ロクロナデ	胎土:白灰色 釉薬:透明釉		室町
80	土坑15	焼締陶器	播鉢	—	(5.2)	14.2	ロクロナデ	暗褐色	信楽	室町
81	土坑165	土師器	皿N	8.0	1.8	4.4	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色	燈明皿	室町
82	土坑165	土師器	皿N	8.6	1.5	5.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
83	土坑165	土師器	皿S	8.4	2.4	3.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	白灰色	燈明皿	室町
84	土坑165	土師器	皿S	11.6	3.1	5.6	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	白灰色		室町
85	土坑165 瓦溝下	土師器	皿S	12.0	3.0	5.2	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
86	土坑165 瓦溝下	土師器	皿S	12.1	3.1	6.0	外:ヨコナデ、オサエ、 不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰白色		室町
87	土坑165	土師器	皿S	12.8	3.0	3.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	白灰色		室町
88	土坑94	土師器	皿Nr	6.0	1.0	3.8	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
89	土坑94	土師器	皿Nr	6.2	1.1	4.3	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
90	土坑94	土師器	皿Nr	6.2	1.4	3.0	外:オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
91	土坑94	土師器	皿Nr	6.4	1.2	3.0	外:オサエ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
92	土坑94	土師器	皿Nr	6.4	1.6	2.6	外:オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
93	土坑94	土師器	皿Nr	6.9	1.3	3.0	外:オサエ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
94	土坑94	土師器	皿N	9.5	2.0	4.4	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ	橙色		室町
95	土坑94	土師器	皿S	12.6	2.1	6.6	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
96	土坑94	土師器	皿S	12.6	2.2	6.4	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
97	土坑94	土師器	皿S	13.0	2.2	6.6	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	白灰色		室町
98	土坑94	国産陶器	平皿	11.6	2.7	6.6	ロクロナデ	胎土:灰白色 釉薬:オリーブ 黄色	貫入多い 灰釉 美濃	室町
99	土坑94	国産陶器	天目茶碗	12.8	6.3	4.3	ロクロナデ	胎土:灰黄褐色 釉薬:黒褐色	天目釉 茶筌使用痕明瞭 に残る 美濃	室町
100	土坑83	土師器	皿N	7.0	1.4	3.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	にぶい黄褐色		室町
101	土坑83	土師器	皿S	8.8	1.8	3.6	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	白灰色	燈明皿	室町
102	土坑83	土師器	皿S	13.2	2.1	6.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色		室町
103	土坑83	輸入磁器 青磁	碗	—	(3.0)	5.4	ロクロナデ	胎土:白灰色 釉薬:薄緑色	見込みに幾何学紋を陰刻	室町
104	土坑133	土師器	皿N	7.0	1.4	3.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ナデ	灰黄褐色		室町
105	井戸211	土師器	皿N	6.8	1.5	3.0	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
106	井戸211 上層	土師器	皿N	7.0	1.5	3.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
107	井戸211	土師器	皿N	7.4	(1.4)	—	外:ヨコナデ、オサエ 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色	燈明皿	室町
108	井戸211	土師器	皿N	7.6	1.6	3.8	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	黄褐色	燈明皿	室町
109	井戸211	土師器	皿S	8.4	1.6	4.6	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色	燈明皿	室町
110	井戸211 上層	土師器	皿S	9.0	1.8	4.0	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
111	井戸211	土師器	皿S	9.2	2.1	丸底	外:ヨコナデ、不調整 内:ヨコナデ、ナデ	橙色		室町

番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			調整技法	色調	備考	時代
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
112	井戸211 上層	土師器	皿S	13.6	2.0	8.0	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	黄橙色		室町
113	井戸211	土師器	皿S	15.8	2.5	9.0	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	黄橙色		室町
114	井戸211 上層	土師器	皿S	20.0	(2.6)	—	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	黄橙色		室町
115	井戸211 裏込め	輸入磁器 白磁	皿	9.6	2.9	3.2	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：白色	体部下半から高台にかけて四方決り貫入有	室町
116	井戸211	土師器	鍋	21.0	(5.0)	—	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ	灰黄橙色	外面煤付着	室町
117	井戸211 掘方	焼締陶器	播鉢	—	(8.0)	15.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	明黄橙色	信楽	室町
118	井戸211	白磁	壺	—	(5.0)	9.0	ロクロナデ	胎土：白色 釉薬：灰白色	疊付露胎	室町
119	井戸211 裏込め	瓦質土器	火鉢	35.8	(7.9)	—	外：ミガキ 内：ヨコナデ	黒灰色	強く被熱し表面のカーボンが剥離	室町
120	井戸211	瓦質土器	火舎	—	(12.1)	—	外：ナデ 内：ナデ	黒灰色	方形火鉢（火舎）口縁部に渦状紋	室町
121	井戸211	瓦質土器	火舎	—	(5.2)	—	ヘラケズリ	黒灰色	方形火鉢（火舎）脚部	室町
122	土坑151	土師器	皿Nr	6.2	1.2	3.0	外：ヨコナデ、オサエ 内：ナデ	灰白色		室町
123	土坑151	土師器	皿Nr	5.9	1.1	3.2	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	黄褐色		室町
124	土坑151	土師器	皿Nr	6.3	1.6	2.2	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	黄橙色		室町
125	土坑151	土師器	皿Nr	6.4	1.1	4.0	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	灰黄褐色		室町
126	土坑151	土師器	皿Nr	7.8	1.5	3.0	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	灰黄褐色		室町
127	土坑151	土師器	皿Nr	7.8	1.4	4.0	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	灰黄褐色		室町
128	土坑151	土師器	皿Nr	7.8	1.4	4.0	外：ヨコナデ、オサエ 内：ナデ	灰黄褐色		室町
129	土坑151	土師器	皿S	8.8	1.6	3.0	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	黄橙色	燈明皿	室町
130	土坑151	土師器	皿S	12.0	2.0	6.4	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	黄橙色		室町
131	土坑151	土師器	皿S	12.2	2.1	6.0	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	黄橙色		室町
132	土坑151	輸入磁器 青花	碗	14.0	4.8	4.8	ロクロナデ	胎土：白色 釉薬：透明	外面に草花紋、見込みに草花紋を具須で描く	室町
133	土坑29 下層	土師器	皿Nr	5.6	1.2	2.0	外：ヨコナデ、オサエ 内：ナデ	にぶい黄橙色		室町
134	土坑29	土師器	皿Nr	5.8	1.2	1.2	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	にぶい黄橙色		室町
135	土坑29	土師器	皿Nr	6.0	0.8	3.0	外：オサエ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	黄褐色		室町
136	土坑29 下層	土師器	皿Nr	6.1	1.2	2.4	外：オサエ 内：ナデ	黄橙色	燈明皿	室町
137	土坑29	土師器	皿Nr	6.4	1.0	3.0	外：オサエ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	橙色		室町
138	土坑29	土師器	皿Nr	6.6	1.2	4.0	外：オサエ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	にぶい黄褐色		室町
139	土坑29 下層	土師器	皿S	9.5	1.5	4.6	外：ヨコナデ、オサエ 内：ナデ	灰黄褐色		室町
140	土坑29	土師器	皿S	11.0	1.8	4.0	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	淡黄橙色	燈明皿	室町
141	土坑29	瓦質土器	鉢	24.4	(5.1)	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	褐灰色		室町
142	土坑29	瓦質土器	不明	—	(7.0)	—	外：ヘラミガキ 内：ナデ	灰黄褐色	刻目突帯2条 渦状スタンプ紋	室町
143	土坑71	土師器	皿S	12.4	2.0	6.0	外：ヨコナデ、オサエ、 不調整 内：ヨコナデ、ナデ	灰黄褐色		室町
144	地業26	土師器	皿Nr	6.4	1.2	4.4	外：オサエ 内：ナデ	黄橙色		室町
145	地業26	土師器	皿Nr	6.8	1.2	3.0	外：オサエ 内：ナデ	黄橙色		室町
146	地業26	土師器	皿S	12.4	3.1	5.2	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	明黄橙色		室町
147	地業26	青磁	碗	—	(3.4)	4.4	ロクロナデ	胎土：白灰色 釉薬：薄緑色	外面に蓮弁紋、見込みに花弁紋を陰刻 貫入全体に有り	室町
148	地業26	輸入磁器 青花	碗	11.0	6.1	4.4	ロクロナデ	胎土：白色 釉薬：透明	見込みに組み合わせた如意頭紋、外面に馬紋を具須で描く 体部内面に透かし彫りで宝珠紋を施す	室町

番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			調整技法	色調	備考	時代	
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)					
149	室4	国産磁器	合子蓋	6.8	1.0	—	ロクロナデ	胎土：白色 釉薬：透明	天井部に「三味楽調合所」 「加州」、裏に「亀田」と 呉須書き 加賀産	江戸	
150	室4	国産磁器	合子身	外側	8.0	3.9	7.4	ロクロナデ	胎土：白色 釉薬：透明	二重に入れ子状 胴部に 「金澤岸川宮竹屋亀田伊 右衛門」と呉須書きを巡 らす 被熱し大きく歪む 加賀産	江戸
				内側	6.8	3.1	6.5				
151	土坑94	瓦質土器	風炉	—	(24.2)	—	外：ミガキ 内：ナデ	黒灰色	円柱の三脚 口縁部に透 かし	室町	
152	土坑133	焼締陶器	甕	62.2	(18.0)	—	ロクロナデ	褐色	胎土粗い 備前	室町	
153	埋甕210	焼締陶器	甕	—	(14.0)	46.5	外：ナデ 内：ナデ	暗褐色	埋甕として使用されてい た。体部上半は打ち掛か れており欠損している。 備前	室町	
154	埋甕258	焼締陶器	甕	—	(70.0)	21.6	外：タタキ 内：ナデ	橙色～灰黄褐色	埋甕として使用されてい た。胴部上位から口縁部 は欠損。 信楽	室町	
155	埋甕28	瓦質土器	壺	18.6	(18.2)	15.0	外：ナデ 内：ナデ	褐灰色	正位に据えられ、内に細 かく砕いた炭が大量に残 っていた。火消し壺と考 えられる。口縁部は欠損。	室町	
156	池3	瓦質土器	火鉢	25.0	22.0	—	外：ナデ、ミガキ 内：ナデ	黒灰色	黄褐色シルト層 (池3) で正位に据えられていた。	江戸	

表7 出土鑄造関連遺物観察表

番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			調整技法	色調	備考	時代
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
鑄1	池3下砂層	鑄造製品	埴塙	高さ 2.6	幅 (3.4)	厚さ 0.4	—	赤紫色	取手欠損 全体に融着	江戸
鑄2	地業47	鑄造製品	柄鏡鑄型	高さ (12.0)	幅 (10.2)	厚さ 2.8	—	橙色	柄部のみ 両面に溝	室町

表8 出土瓦観察表

番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			調整技法	色調	備考	時代
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)				
瓦1	井戸275	瓦	軒平瓦	瓦当高 5.5	瓦当幅 (17.2)	—	不明	灰色	半裁花紋	平安
瓦2	井戸275	瓦	平瓦	24.2	20.1	3.1	凸面縄目痕、凹面布目痕	灰色		平安
瓦3	井戸275	瓦	丸瓦	(14.4)	12.2	2.4	凸面ナデ、凹面布目痕・ナデ	灰色		平安
瓦4	井戸275	瓦	丸瓦	32.2	24.4	3.2	凸面縄目痕、凹面布目痕・ナデ	灰色		平安
瓦5	柱穴302	瓦	磚	23.7	23.6	4.9	両面板ナデ	黒灰色	礎板に転用	室町

表9 出土石製品観察表

番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			特徴	色調	備考	時代
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)				
石1	土坑15	石製品	蓋	6.4	6.4	1.1	側面に装飾彫り「王盛公」陰刻	灰白色		室町
石2	土坑94	石製品	硯	6.3	3.6	0.8	携帯硯	灰色		室町
石3	土坑93	石製品	硯	16.4	(4.5)	1.2	天然硯	暗灰色		室町
石4	土坑29下層	石製品	硯	12.8	7.2	1.6	長方形硯	暗灰色		室町
石5	土坑102	石製品	硯	10.1	6.4	1.5	長方形硯	暗灰色		室町
石6	土坑102	石製品	砥石	10.0	6.4	1.4		灰白色		室町
石7	集石118	石製品	砥石	5.6	4.4	0.9		明黄褐色		室町
石8	土坑207	石製品	砥石	13.2	12.2	4.8		灰色		室町
石9	土坑29	石製品	砥石	17.2	10.4	5.0		灰色		室町
石10	礎石46	石製品	石臼	径 26.9	—	高さ 9.2		灰白色	正位に据えて礎石として転用されていた。	室町
石11	室4	石製品	石臼	推定径 30.0	—	高さ 8.2	片面に溝	赤橙色	強く被熱している。	江戸
石12	柱穴212	石製品	水晶	3.8	1.4	0.4		透明		平安か
石13	ビット247	石製品	水晶	4.2	2.5	0.7		透明		平安か
石14	ビット247	石製品	水晶	2.5	2.2	0.2		透明		平安か

表 10 出土金属製品観察表

遺物番号	遺構	種類		法量			備考	特徴
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
金属 1	土坑235	銀製品	鍍金飾り	2.7(長軸)	2.6(短軸)	0.5(高さ)		表に施紋及び鍍金がなされている。紋様は錆が多く、不明。鍍金は金箔、下地は銀と銅の合成したものである。
金属 2	室 4	青銅製品	金属皿	12.2	10.9	0.1		金属へらと一緒に出土した。皿の内側は水銀で朱塗りがなされている。
金属 3	室 4	青銅製品	金属へら	5.9	1.9	0.1		金属皿と一緒に出土した。匙の表には水銀で朱塗りがなされている。
金属 4	土坑94	青銅製品	青銅飾り金具	5.2	1.5	0.1		菱形の銅板。紋様は見られない。
金属 5	土坑15	青銅製品	青銅棒	6.5	0.3	0.3		両端が尖っている。
金属 6	地業26	青銅製品	青銅釘	4.9(長さ)	1.2(頭直径)	0.3(釘太さ)		釘の頭は円形、釘の胴は四角になっている。
金属 7	土坑102	銅製品	銅製板状飾り	11.5(長軸)	4.5(短軸)	0.2(厚さ)		木片が付着している。
				直径	孔径			
金属 8	土坑15	銅製品	メダル状製品	1.7	—	0.2	用途不明。	王冠のような紋様がある。有孔。分析の結果、表は銅製品だが、裏は鉛が多い。
金属 9	包含層	銅製品	銭状製品	1.4	0.4	0.2	裏面は無紋。用途は不明。	片面はヒダ状になっている。
金属 10	土坑231	古銭	開元通寶	2.3	0.7	0.2	裏面の凹凸はほとんどない。	真書
金属 11	土坑83	古銭	祥符元寶	2.5	0.6	0.2	裏面の凹凸は残っているが、摩耗している。	真書
金属 12	包含層	古銭	祥符通寶	2.4	0.6	0.2	裏面の凹凸はほとんどなく、文字も摩耗している。	真書
金属 13	地業47	古銭	天禧通寶	2.4	0.7	0.2	裏面の凹凸はほとんどなく、文字も摩耗している。	真書
金属 14	池3	古銭	皇宋通寶	2.4	0.7	0.1	裏面に凹凸はなく、文字もほとんど見えない。	真書
金属 15	土坑83	古銭	皇宋通寶	2.4	0.7	0.2	裏面に凹凸はなく、文字もほとんど見えない。また、孔がいびつ。	篆書
金属 16	地業26	古銭	熙寧元寶	2.4	0.6	0.2	裏面は錆と土が同化して、文字も見にくい。	真書
金属 17	地業26	古銭	熙寧元寶	2.3	0.7	0.2	裏面の凹凸はなく、孔の形もいびつ。	真書
金属 18	地業47	古銭	元豊通寶	2.4	0.7	0.2	孔の形がいびつ(摩耗?)。	草書
金属 19	地業26	古銭	元豊通寶	2.3	0.6	0.2	裏面の縁の形がいびつ。	草書
金属 20	土坑207	古銭	元豊通寶	2.4	0.7	0.2	文字や凹凸がはっきりしている。	草書
金属 21	地業26	古銭	元祐通寶	2.5	0.7	0.2	裏面の凹凸はなく、鬆が見られる。	草書
金属 22	地業47	古銭	元祐通寶	2.4	0.7	0.2	裏面の凹凸はほとんどなく、文字も潰れて見にくい。	草書
金属 23	地業26	古銭	紹聖元寶	2.5	0.6?	0.2	半分に割れている。裏面の凹凸はない。	真書
金属 24	土坑83	古銭	元符通寶	2.3	0.7	0.2	文字も裏面の凹凸もはっきりしている。	篆書
金属 25	地業47	古銭	政和通寶	2.4	0.6	0.2	文字も裏面の凹凸もほとんど見えない。	真書
金属 26	包含層	古銭	政和通寶	2.4	0.5	0.2	裏面の凹凸はほとんどない。	篆書
金属 27	柱穴67	古銭	洪武通寶	2.1	0.6	0.2	裏面の縁の形がいびつ。鬆による欠がある。	真書。裏面に「一銭」
金属 28	土坑151	古銭	洪武通寶	2.3	0.6	0.2	文字も裏面の凹凸もはっきりしている。	真書
金属 29	土坑133	古銭	永樂通寶	2.5	0.6	0.2	裏面の凹凸はあまり見られない。	真書
金属 30	包含層	古銭	寛永通寶	2.4	0.6	0.2	内部まで錆が進行している。	錆で文字が不明瞭。
金属 31	室4 裏込め	古銭	寛永通寶	2.4	0.6	0.2	文字も裏面の凹凸もはっきりしている。	真書
金属 32	室4	古銭	寛永通寶	2.4	0.6	0.2	錆と土が硬く付着している。	真書
金属 33	室4	古銭	寛永通寶	2.3	0.7	0.2	錆が多く、表も裏も見にくい。	真書
金属 34	室4	古銭	寛永通寶	2.4	0.7	0.2	文字も裏面の凹凸もはっきりしている。被熱でゆがんでいると思われる。	真書
金属 35	土坑94	古銭	大口通寶	2.3	0.6	0.2	割れているが、内部までは錆びていない。	真書
金属 36	地業26	古銭	天口通寶	2.4	0.6?	0.2	文字も裏もはっきりしている。割れているが、内部まで錆が進行していない。	真書

版 图



1 1面 全景（北から）



2 室4（南西から）



1 室4 三和土製施設（南東から）



2 室4 三和土製施設（北から）



1 室2 (南西から)



2 室2 三和土製施設 (南から)



1 2面 全景 (北から)



2 埋甕 28 (西から)



3 瓦溝 21 (東から)



1 埋甕 258 (東から)



2 埋甕 210 (南から)



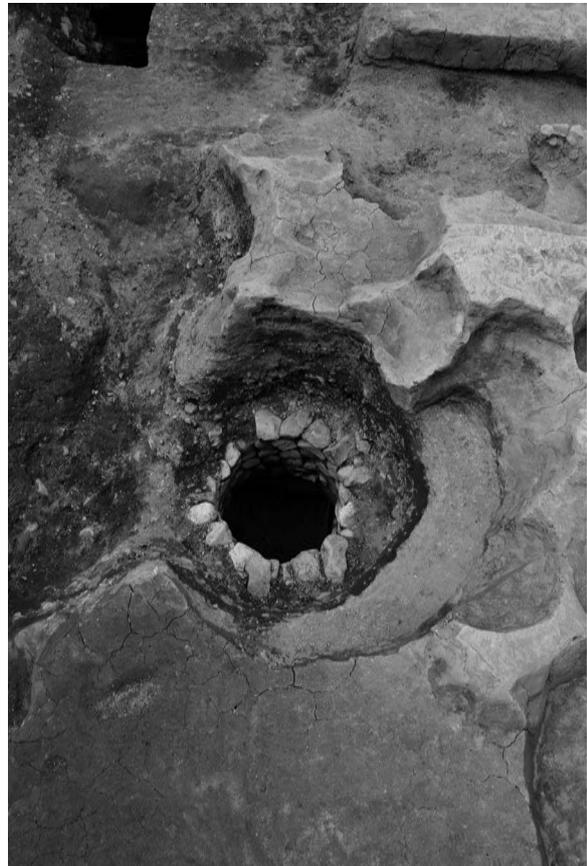
3 土坑 15 (東から)



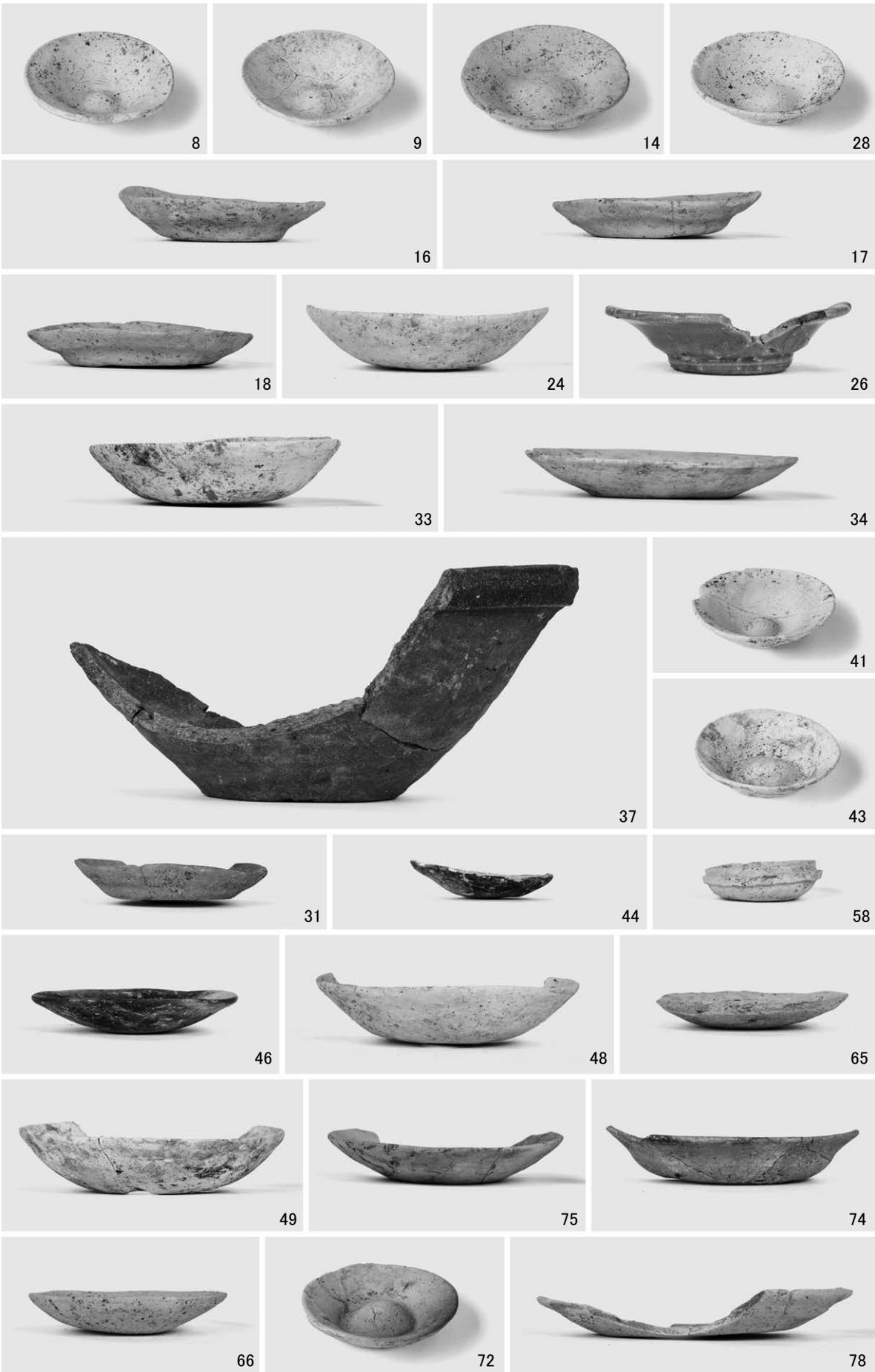
1 3面 全景 (北から)



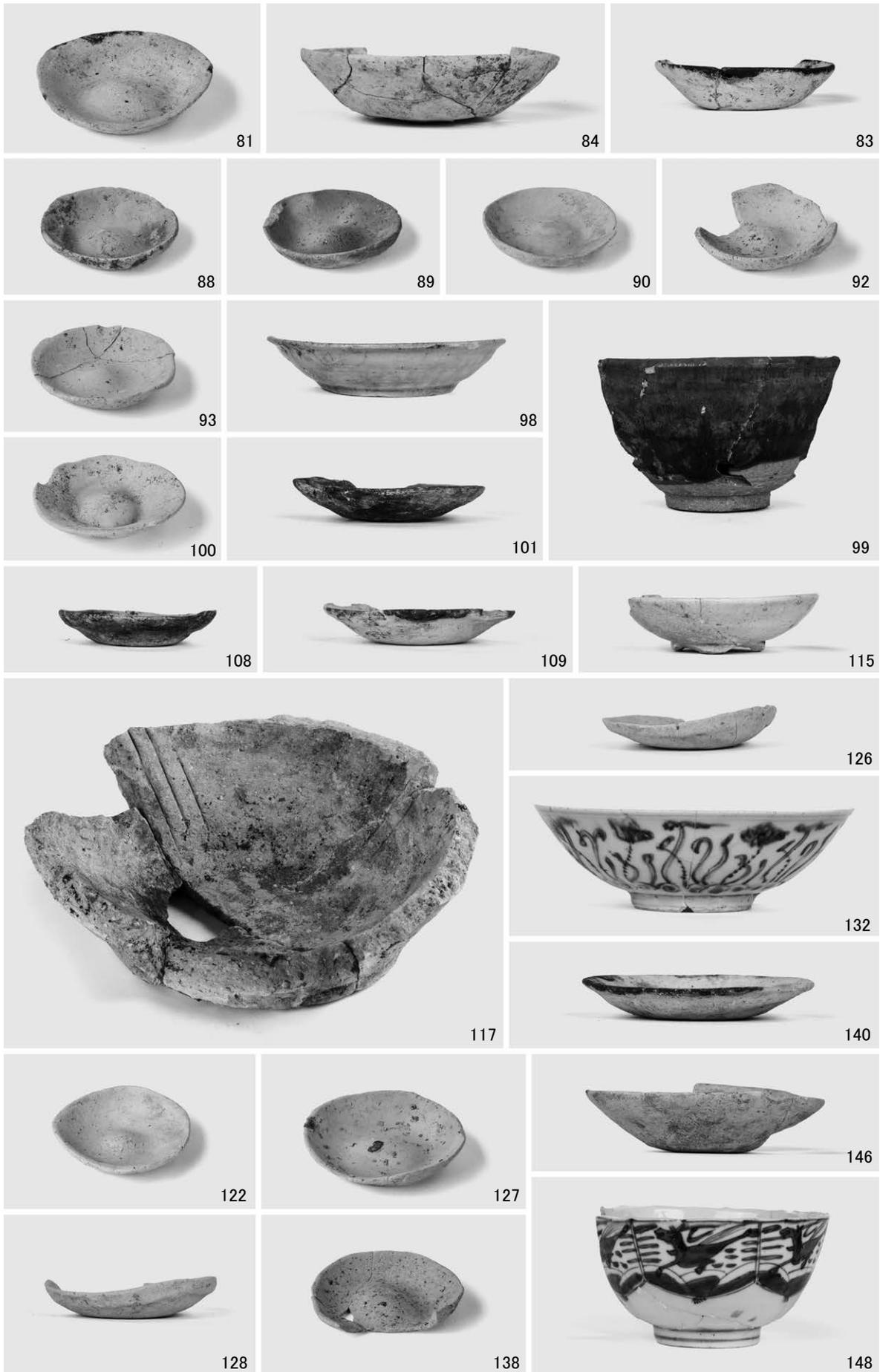
2 井戸 275 (東から)



3 井戸 211 (南西から)



出土遺物 1



出土遺物 2



149



150



鑄1



156



155

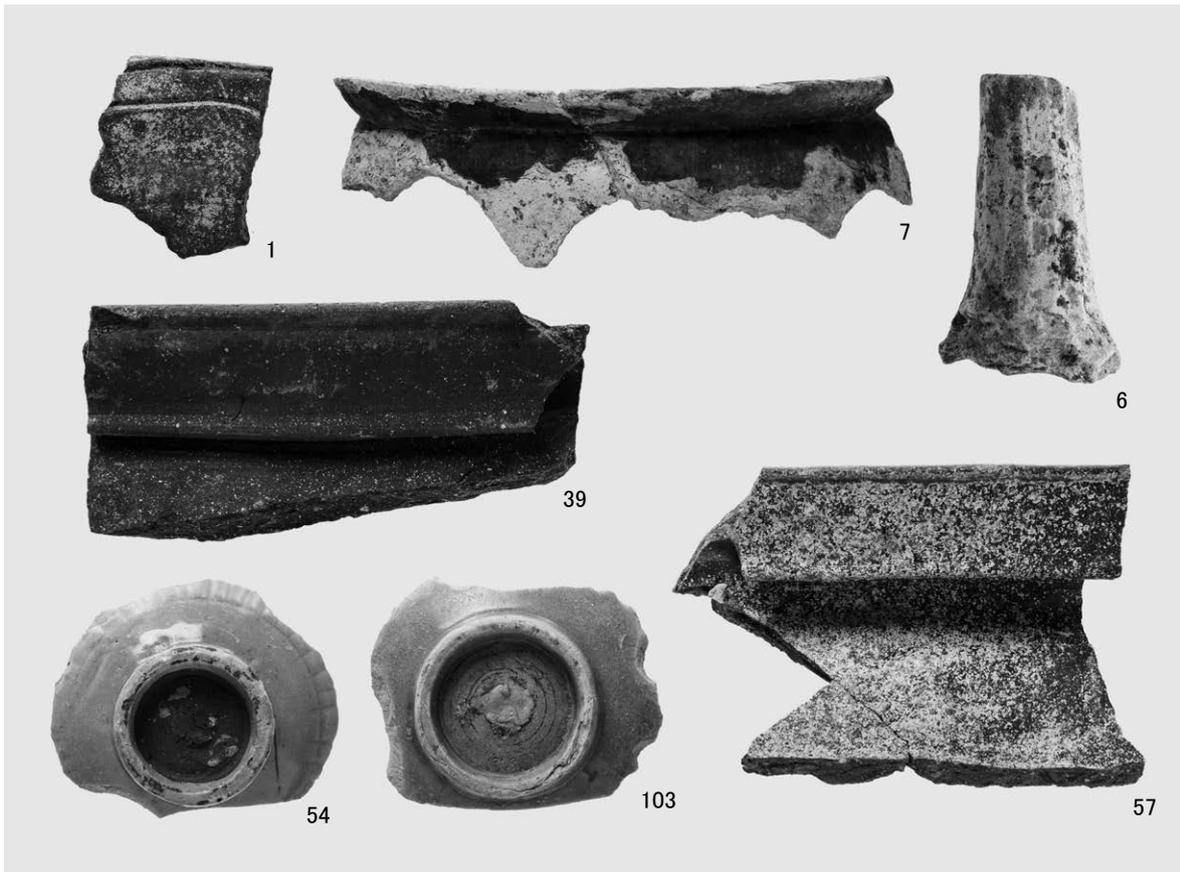


154

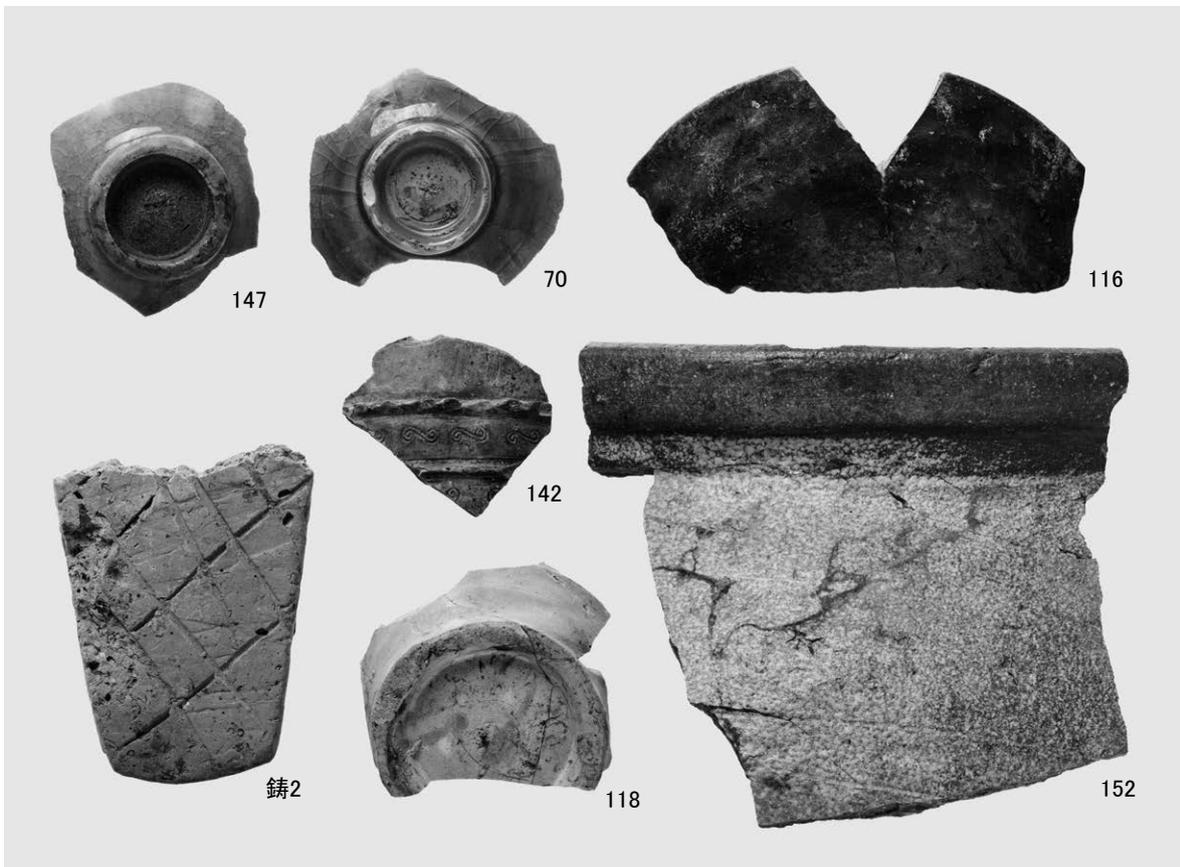


153

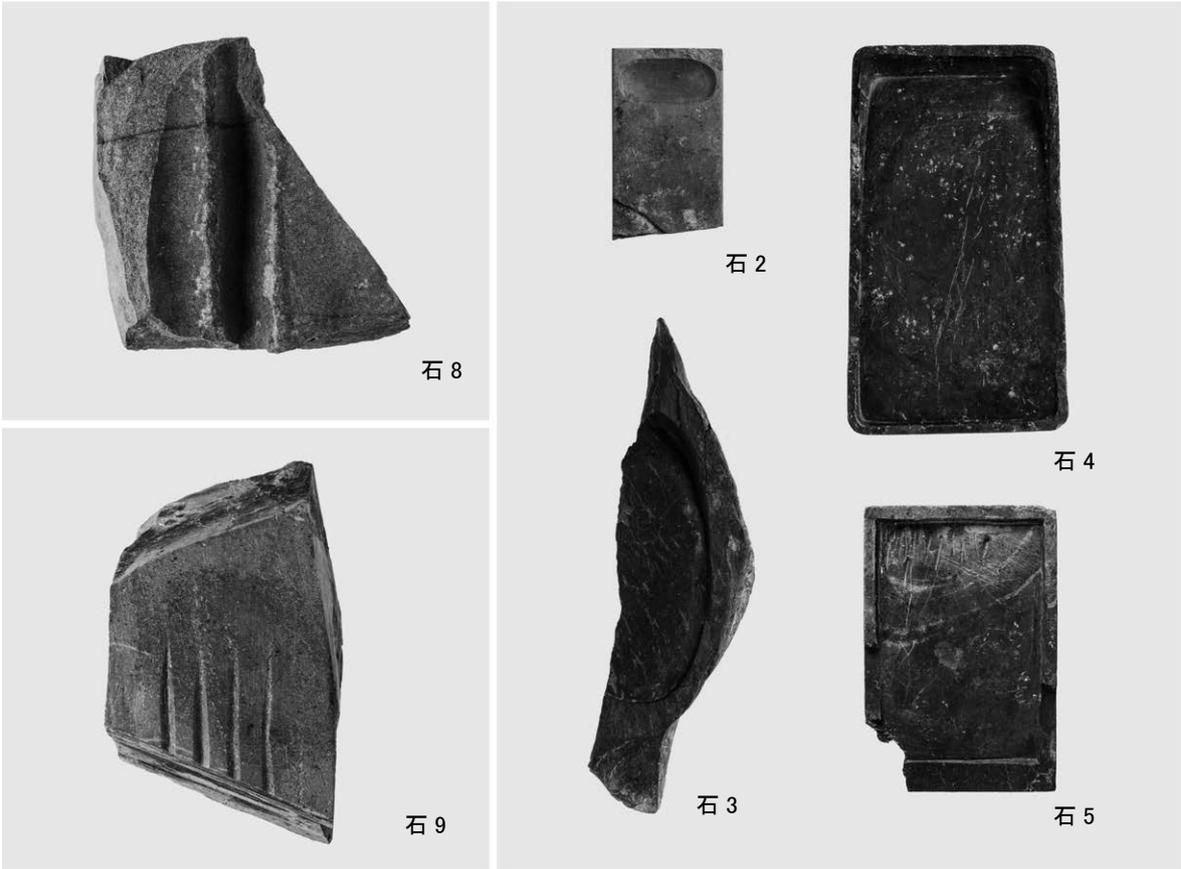
出土遺物 3



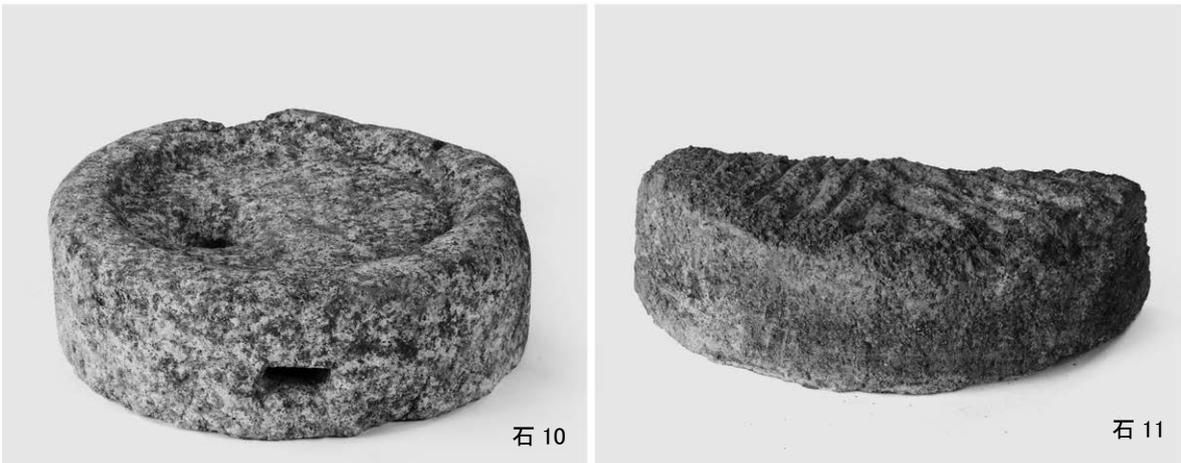
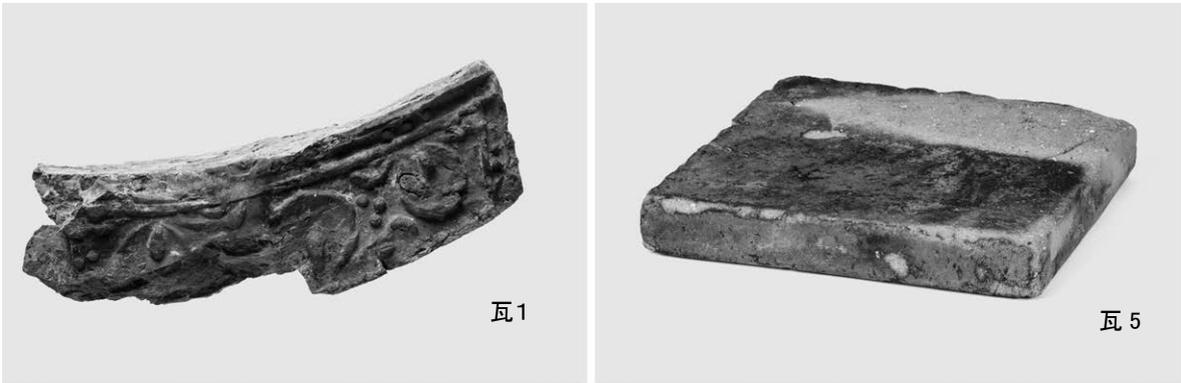
出土遺物 4



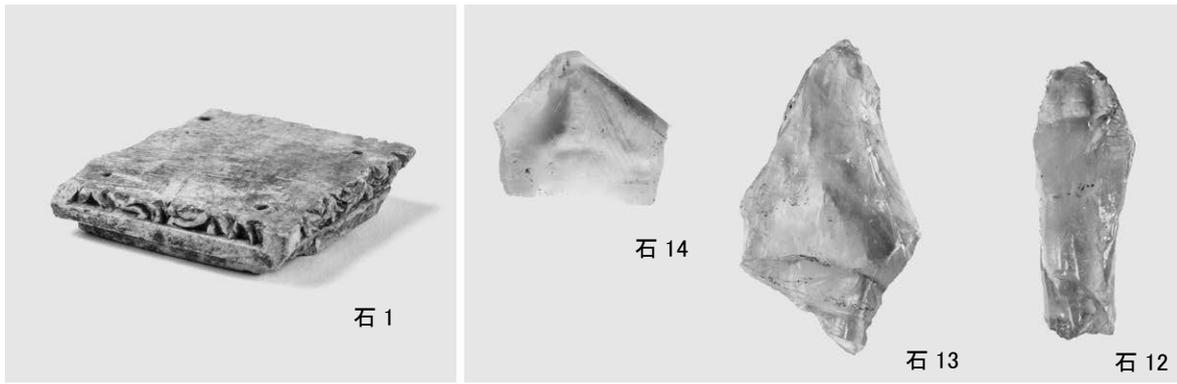
出土遺物 5



出土石製品 1



出土瓦、出土石製品 2



出土石製品 3



出土金属製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうごちょうあと・からすまおいけいせき							
書名	平安京左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡							
シリーズ名	アルケス発掘調査報告							
シリーズ番号	2							
編著者名	持田 透							
編集機関	合同会社アルケス							
所在地	京都市山科区西野山中臣町75番地6							
発行所	合同会社アルケス							
発行年月日	西暦2019年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょう 平安京 さきょうさんじょうさんぼう 左京三条三坊 ごちょうあと・からすま 五町跡・烏丸 おいけいせき 御池遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 えんのぎょうじやちよう 役行者町361他	26100	1 464	35度 0分 34秒	135度 45分 28秒	2018年3月 5日～2018 年5月7日	224㎡	住宅建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	集落跡	縄文時代		縄文土器		平安時代の縦板組 横棧井戸を検出。 室町時代の粘土採 掘土坑を多数検出。 室町時代後期から安 土桃山時代の建物遺 構を検出。		
へいあんきょう 平安京 さきょうさんじょうさんぼう 左京三条三坊 ごちょうあと 五町跡	都城跡	平安時代	井戸	土師器、陶器、瓦		江戸時代後期の町屋 跡で、石組の巨大な 室を検出。三和土で 付属施設を設ける。 また室から加賀藩の 薬入れが出土した。		
		鎌倉時代	井戸	土師器、陶器、磁器、 瓦器				
		室町時代～ 安土桃山時代	掘建柱建物、井戸、 土坑、地業	土師器、陶器、磁器、 焼締陶器、石製品				
		江戸時代	室、井戸、土坑	土師器、陶器、磁器、 瓦				

アルケス発掘調査報告 2

平安京左京三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡

発行日 2019年10月31日

編集
発行 合同会社 アルケス

住所 京都市山科区西野山中臣町75番地6
〒607-8305 TEL 075-582-5172

印刷 佐川印刷株式会社

